

ARI TA KOTABE  
有田・小田部 27

— 有田遺跡群第178次調査報告 —



1997

福岡市教育委員会

ARI TA

KOTABE

# 有田・小田部 27

— 有田遺跡群第178次調査報告 —



遺跡略号 ART-178  
遺跡調査番号 9516

1997

福岡市教育委員会



## 序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな自然と数多くの遺跡が残されており、これらを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めと考えております。

さて、本市教育委員会では、近年の各種開発事業に伴って失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、遺跡の記録保存に努めております。

今回報告する早良区有田遺跡群178次調査では、旧石器時代後期・古墳時代中期～後期の墓地を検出し、特に有田遺跡群での古墳時代墓地の変遷を考える上で重要な成果となりました。

つきましては、本報告書が本市文化財保護行政についてのご理解と認識を深める一助となり、また学術研究の資料としても活用して頂ければ幸甚に存じます。

また最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を頂いたことに対し、心から感謝を申し上げます。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

## 例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が平成7(1995)年6月1日から同年8月22日まで発掘調査を実施した、共同住宅建設に伴う有田遺跡群の第178次緊急発掘調査の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、掘立柱建物跡をS B、竪穴住居跡をS C、溝状遺構・周溝墓周溝をS D、土坑をS K、貯藏穴をS U、古墳・周溝墓をS O、竪穴式石室・石棺墓・木蓋石棺墓をS Q、土壙墓・石蓋土壙墓・木棺墓をS R、壹棺墓をS T、陸橋をS F、柱穴をS P、そのほかの遺構をS Xとした。柱穴には4桁、柱穴以外の遺構には3桁の遺構番号を与え、同一の番号の重複はない。
3. 本書に使用した遺構図は、岸本圭、黒田和生、斎藤輝行、杉本岳史、立石真二、坪井哲哉、八丁山香、松藤暢邦、宮田剛、成在賢、奥圭珍、姜元均、孔敏奎、孫喰鍋、杉山富雄、加藤良彦、荒牧宏行、皆波正人、長家伸、星山洋、白井克也が作成し、現場写真是、空中写真企画、白井が撮影した。遺物実測図は吉留秀敏、白井が作成した。製図は吉留、白井が行った。
4. 有田遺跡群第178次調査に係る遺物・記録類(図面、写真、スライドなど)は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。
5. 本書の執筆は吉留、白井が、編集は、白井が行った。

| 遺跡調査番号 | 9516              |        | 遺跡略号              | ART-178 |                   |
|--------|-------------------|--------|-------------------|---------|-------------------|
| 調査地地籍  | 早良区南庄3丁目21番ほか     |        | 分布地図番号            | 81-0309 |                   |
| 開発面積   | 966m <sup>2</sup> | 調査対象面積 | 966m <sup>2</sup> | 調査面積    | 747m <sup>2</sup> |
| 調査期間   | 95年6月1日～8月22日     |        | 事前審査番号            | 6-2-478 |                   |

## [本文目次]

|     |                    |    |
|-----|--------------------|----|
| I   | はじめに.....          | 1  |
| 1.  | 調査にいたる経過.....      | 1  |
| 2.  | 調査の組織.....         | 1  |
| 3.  | 遺跡の位置とこれまでの調査..... | 1  |
| II  | 調査の記録.....         | 4  |
| 1.  | 調査の経過.....         | 4  |
| 2.  | 検出された遺構.....       | 6  |
| 3.  | 層位と出土地形.....       | 6  |
| 4.  | 旧地形.....           | 6  |
| 5.  | 旧石器時代の遺物.....      | 6  |
| 6.  | 弥生時代の集落と出土遺物.....  | 9  |
| (1) | 壠立柱建物跡.....        | 9  |
| (2) | 竪穴住居跡.....         | 9  |
| (3) | 土坑.....            | 12 |
| 7.  | 古墳時代の墳墓群と出土遺物..... | 13 |
| (1) | 円墳.....            | 14 |
| (2) | 円墳の周溝内埋葬.....      | 15 |
| (3) | 円形周溝墓.....         | 18 |
| (4) | 周溝を伴わない墳墓.....     | 35 |
| 8.  | 古墳時代の集落と出土遺物.....  | 39 |
| (1) | 竪穴住居跡.....         | 39 |
| (2) | 粘土貯藏穴.....         | 41 |
| (3) | 溝状構造.....          | 43 |
| III | まとめ.....           | 46 |

## [挿図目次]

|        |                                |    |
|--------|--------------------------------|----|
| Fig. 1 | 調査区位図.....                     | 3  |
| Fig. 2 | 調査区全体図.....                    | 5  |
| Fig. 3 | 遺跡の変遷.....                     | 8  |
| Fig. 4 | 旧石器時代の遺物.....                  | 10 |
| Fig. 5 | SB-910 遺構実測図 .....             | 11 |
| Fig. 6 | SC-700, 720 遺構・遺物実測図.....      | 12 |
| Fig. 7 | SC-710, 730, 740 遺構・遺物実測図..... | 13 |
| Fig. 8 | SK-044 遺構・遺物実測図 .....          | 14 |
| Fig. 9 | SO-150 遺構断面実測図 .....           | 15 |
| Fig.10 | SO-150 遺構平面実測図 .....           | 16 |
| Fig.11 | SD-450 出土遺物実測図 .....           | 17 |
| Fig.12 | SR-151 遺構火薬測図 .....            | 18 |
| Fig.13 | ST-452 遺構・遺物実測図 .....          | 19 |
| Fig.14 | SR-110 遺構実測図 .....             | 20 |
| Fig.15 | SO-120 遺構火薬図 .....             | 22 |
| Fig.16 | SR-121 遺構実測図 .....             | 24 |
| Fig.17 | SR-121 別番品実測図 .....            | 26 |
| Fig.18 | SO-130 遺構・遺物実測図 .....          | 27 |
| Fig.19 | SQ-131 遺構実測図 .....             | 28 |
| Fig.20 | SO-140 遺構実測図 .....             | 30 |
| Fig.21 | SQ-141 遺構実測図 .....             | 31 |
| Fig.22 | SQ-141 石室内実測図 .....            | 32 |
| Fig.23 | SO-160 遺構実測図 .....             | 34 |
| Fig.24 | SO-170 遺構・遺物実測図 .....          | 36 |
| Fig.25 | SQ-171 遺構実測図 .....             | 37 |

|        |   |    |
|--------|---|----|
| Fig.26 | SQ-171, SR-172 遺構・遺物実測図 .....           | 38 |
| Fig.27 | SR-001, 002, SQ-003, 004 遺構・遺物実測図 ..... | 40 |
| Fig.28 | SC-750, 760 実測図 遺構 .....                | 42 |
| Fig.29 | SC-750, 760, 770, 780 遺構・遺物実測図 .....    | 44 |
| Fig.30 | SU-790, SD-021 遺構・遺物実測図 .....           | 45 |

## [図版目次]

|      |  |  |
|------|--|--|
| PL.1 | 調査区全景  |  |
| PL.2 | (1) SO-150全景 (上空から) (2) SO-150全景(東から) (3) SR-151 (4) 赤色顔料内蔵土器 1 (5) 赤色顔料内蔵土器 2     |  |
| PL.3 | (1) 周溝内填墓群 (2) ST-452墓塚(上から) (3) ST-452(上から) (4) ST-452(東から) (5) SR-453 (6) SQ-454 |  |
| PL.4 | (1) SO-110全景 (2) SR-111蓋石 (3) SR-111墓壙 (4) SO-130全景 (5) SQ-131蓋石 (6) SQ-131棺内      |  |
| PL.5 | (1) SO-120全景 (2) SR-121 (3) 銅鏡出土状況 (4) 右手首装着玉類出土状況 (5) 左手首装着玉類出土状況                 |  |
| PL.6 | (1) SO-140全景 (2) SQ-141蓋石 (3) SQ-141石室内 (4) SO-160全景 (5) SR-161                    |  |
| PL.7 | (1) SO-170全景 (2) SQ-171蓋石 (3) SQ-171墓壙 (4) SQ-171棺内                                |  |
| PL.8 | (1) SR-172土器出土状況 (2) SR-172土器被覆状況 (3) SR-001完掘状況 (4) SC-750全景                      |  |

# I はじめに

## 1. 調査にいたる経過

1995年（平成7年）3月31日、原井正義氏より早良区南庄3丁目214番における埋蔵文化財事前審査順が埋蔵文化財課に提出された。申請地は有田遺跡群の範囲内であり、北に延びた台地の中央北端近くであったので、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を同年4月20日に実施した。試掘は東西方向のトレーン1本を設け、地表下0.20~0.25mの鳥居ローム層上面で堅穴住居跡または溝状遺構、柱穴などとみられる遺構が検出され、弥生土器が出土した。また、近隣のこれまでの調査で弥生時代や古墳時代の集落・墳墓が確認されており、発掘調査以外でも、石棺墓が発見されるなど、遺跡の存在は明らかであった。申請地で予定される共同住宅建設に当たって土地を切り下げることが予定されており、遺跡が破壊されることには至らなかったので、関係者と協議の結果、記録保存のための本調査を実施することとなった。共同住宅建設の施工である株式会社クリエート福岡からの委託事業として行うこととし、本調査は95年6月1日から着手した。

## 2. 調査の組織

調査委託：株式会社クリエート福岡

調査主体：福岡市教育委員会 教育長 尾花 剛

調査総括：文化財部長 後藤 直

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

埋蔵文化財課第一係長 横山邦嶽

調査庶務：埋蔵文化財課第一係 四田結香

調査担当：埋蔵文化財課第一係 白井克也

試掘調査：埋蔵文化財課第二係 山口讓治、池田祐司

調査補助：岸本圭、黒田和生、重藤輝行、杉本岳史、立石真二、坪井哲哉、八丁由香、松藤暢邦、宮田剛、成在賢、奥毛珍、姜元均、孔敏奎、孫曉鶴

調査作業：網田美代野、井上トミコ、川口シゲノ、清末シズエ、田中榮、西島マツ子、西崎ムラ子、西崎洋子、西畠盛行、原ハナエ、平田千鶴子、平田照子、平田政子、保野忠津代、松木ミツ子、森山早苗、山下アヤ子、結城千代子、脇坂チカ、脇坂信重、脇坂ミサヲ

整理作業：衛藤琴美、近藤美智子、永友和子

このほか、赤色顔料の分析について本田光子氏（別府大学）、旧石器時代遺物の実測・分析について吉留秀敏氏（福岡市埋蔵文化財センター）、出土銅鏡の保存処理・修復について比佐陽一郎氏（福岡市埋蔵文化財センター）の協力を得た。

## 3. 遺跡の位置とこれまでの調査

今回の調査区は、有田遺跡群のうち、最も北に延びる南庄地区の台地上に位置する。有田遺跡群の180次を超える調査をすべて概観する余裕は本書にはないので、全体についてはこれまでの報告書を参照していただくこととし、有田遺跡群の中でもこれまでの調査例が比較的少ない南庄地区の地形と調査実績を振り返ってみよう。

南庄3丁目地内の舌状の台地は、細かくみれば浅い谷を挟む2条の低い尾根からなる。仮に南庄東尾

根と南庄西尾根と称するならば、第178次調査地点は南庄西尾根の東側斜面に位置することになる。

南庄地区でのこれまでの発掘調査は、ほとんどが南庄西尾根で実施されている。

第58次調査（8120）は、南庄西尾根の最高所近くで行われた。弥生時代中期の円形竪穴住居跡が検出されている。「有田・小田部第19集」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第377集）に報告されている。

第76次調査（8304）・第128次調査（8730）地点は第58次調査地点の東に当たり、東側に緩く傾斜している。第76次調査で古墳時代の竪穴住居跡と奈良～平安時代の掘立柱建物跡、第128次調査では弥生時代後期前半の土坑、古墳時代の竪穴住居跡、古墳時代以降の棚列が検出された。第76次調査成果は「有田・小田部第6集」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集）、第128次調査成果は「有田・小田部第12集」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第264集）に報告されている。

第94次調査（8420）は第128次調査地点のやや南側で行われた。掘立柱建物跡が検出されたが、未報告である。

第85次調査（8313）・第89次調査（8317）は南庄西尾根の西側斜面で行われた。このうち第89次調査地点では、古墳時代の古墳跡とみられる周溝状造構が検出された。今回の調査成果に照らせば、注目すべき重要な調査事例といえる。第85次・89次調査ともに未報告である。

第119次調査（8701）は、南庄における台地の西端近くの斜面で行われた。弥生時代中期の甕棺墓と近世の土坑が検出された。「有田・小田部第12集」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第264集）に報告されている。

第97次調査（8423）は、南庄東尾根で行われた唯一の調査であり、東側は金屑川の浸食を受けていた。弥生時代終末～古墳時代初頭の甕棺墓、古墳時代と推定される土塚墓が検出された。「有田・小田部第7集」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集）に報告されている。

2条の尾根の間の深い谷部分には調査例がない。

また、今回の調査区の北側、南庄3丁目215番地では、1973年に石棺墓が発見された。やはり西尾根の東側斜面に当たる。主軸を北西～南東方向に向けていたという。現在この石棺は原北小学校敷地内に移築されている。

こうした成果と、小田部地区の大型円墳（筑紫殿塚・松浦殿塚）の存在をふまえて、「南庄地区に墳墓地域がある」という想定も表明されていた〔山崎龍雄1993：3〕。

結論を先取りして述べるならば、今回の調査は、これまでの調査成果により想定された古墳時代墳墓群が、厳然と、かつ、かなりの規模で存在したと確認したことに意義があるといえよう。

#### 【南庄地区的調査報告】

- 井澤洋一 1994 「第58次調査」『有田・小田部第19集』107-112頁  
松村道博 1985 「第76次調査」『有田・小田部第6集』157-161頁  
谷沢 仁 1986 「第97次調査」『有田・小田部第7集』161-164頁  
山崎龍雄 1991 「第119次調査」『有田・小田部第12集』8-26頁  
米倉秀紀 1991 「第128次調査」『有田・小田部第12集』58-63頁  
山崎龍雄 1993 「立地と調査の成果」『有田小田部第18集』3-5頁

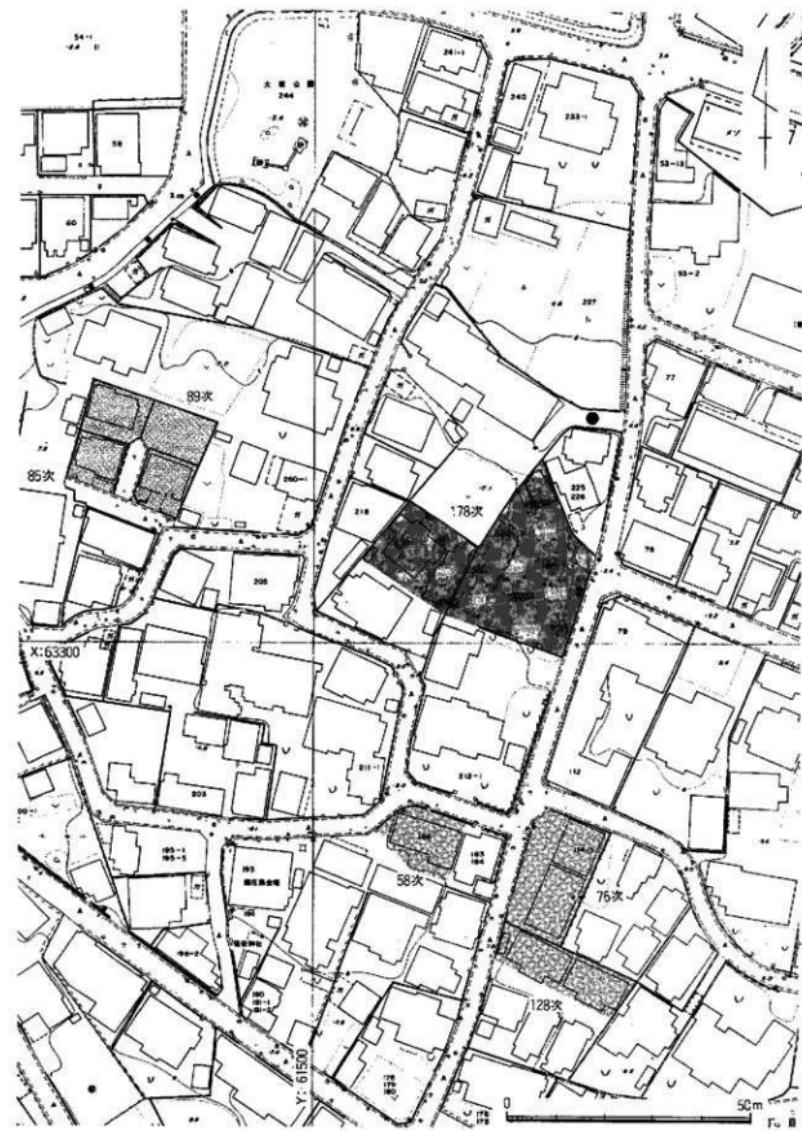


Fig. 1 调查区位置图

## II 調査の記録

調査地は南庄3丁目214番と同217番にまたがる。二つの土地で、調査の進行、地形・遺構の遺存状況に差があるので、便宜上、前者（南庄3丁目214番）を東半部、後者（南庄3丁目217番）を西半部と呼ぶことにする。調査地の現況は、東半部では畑、西半部では宅地であり、地表面での標高は7mである。

### 1. 調査の経過

6月1日に調査を開始したが、調査地西半部に建物が残ったまま調査に着手したため、まず、東半部の表土を重機で剥ぎだ。この斜面に周溝墓が存在することが、この時点で認識された。

6月5日より東半部の236m<sup>2</sup>について遺構検出を開始し、周溝墓群と集落の重複する弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡であり、遺構がかなり密集していることが確認された。

建物解体終了後の6月21日から西半部の表土を重機で剥ぎ、この地点でも円墳や周溝墓の周溝と思われる溝や、木棺墓、竪穴住居跡、土坑などの集落開闢遺構が検出された。

6月30日午後から7月6日午前までの集中豪雨は、遺構検出面を傷つけ、調査区の壁が崩落して遺構が埋没するという事態を引き起こしたが、作業員諸氏の尽力により半日で復旧し、7月8日に石棺墓SQ-131、10日に石蓋土壙墓SR-111、13日に竪穴式石室SQ-141をそれぞれ開き、調査を進めた。特に、神戸の高麗大學校で考古学を専攻する学生5名が、竪穴式石室SQ-141の調査に主導的な役割をはたした。

竪穴式石室には副葬品の存在が期待され、福岡市教育委員会文化財部から多くの視察者が訪れたが、このために現場付近の路上駐車が増し、近隣からクリエート福岡を通じて苦情が伝えられるほどであったが、石室が開かれて副葬品が存在しないことがわかると、路上駐車も自ずから解消し、その後は路上駐車の問題は起らなかった。

西半部の円墳の周溝SD-450を掘り下げたところ、7月12日、楕円形の遺構が周溝覆土を切っていることがわかった。壁と床の区別なく、疊寄りに八女粘土が集積しており、粘土貯蔵穴と判断し、SU-790とした。

7月8日には旧石器時代包含層内に黒曜石剝片が存在することが認められた。それまでにも遺構の覆土に黒曜石の石器や剝片が混入してはいたが、これによって包含層も存在することが確認された。

7月19日までに最初の調査区の遺構精査をほぼ終了し、空中写真を撮影した。

7月22日・23日に通過した台風3号は、時間雨量が多かったため、地山がかなり傷んだ。また、地形に従いつつ互いに共有しあう周溝墓周溝を完掘したため、調査区に降った雨の多くが周溝SD-440に集まつて流れ、溝底が浸食され、溝が深く長くなってしまうという現象も起こった。

7月26日には木棺墓SR-121の棺内で勾玉が検出され、27日には勾玉、小玉、28日には管玉も発見された。

7月28日までに竪穴住居跡SC-750の貼床を剥し、完掘したが、貼床の下に、円形周溝墓の周溝SD-461と、単独の土壙墓SR-002が存在することがわかり、急ぎ調査することにし、これらも7月31日までに完掘した。

8月1日から、調査区の北側を拡張した。その結果、調査区東半部北側に円形周溝墓1基（主体部は2基）、周溝を作わない墳墓2基が、調査区西半部北側に墳墓主体部1基が確認された。西半部のそれは、円墳SO-150の主体部の可能性もあった。



Fig. 2 調査区全体図 (1/250)

8月4日までに円墳周溝SD-450の未掘部分を完掘し、周溝内埋葬3基を検出した。これにより、拡張部分での墳墓の検出は8基におよんだ。

8月8日には木棺墓SR-121を再々拡張し、この部分で仿製鏡1面を検出した。

8月9日までに、整穴式石室SQ-141を除くすべての遺構の調査を終了したが、SQ-141の調査は難航していた。調査予定期間は8月11日までとされていたが、埋蔵文化財課第1係の総力を結集して12日までにSQ-141の完掘、実測、撮影をはたした。

その後器材撤収などで時間を必要とし、8月22日に、現場でのすべての作業を無事終了した。

## 2. 検出された遺構

都合12週間の期間に747m<sup>2</sup>を調査した。検出された遺構は、集落関係では孤立柱建物跡1棟、竪穴住居跡9棟、粘土貯蔵穴1基、溝状遺構1条、土坑6基、墳墓関係では円墳1基（主体部は木棺墓か）、円形周溝墓6基（主体部は竪穴式石室1、木棺墓1、石棺墓2、石蓋上壙墓1、土壙墓2）、木棺墓1基、石棺墓1基、木蓋石棺墓2基（うち1基は円墳の周溝内埋葬）、土壙墓2基（うち1基は円墳の周溝内埋葬）、壺棺墓1基（円墳の周溝内埋葬）であった。出土遺物は土器、石器、銅鏡、玉類、赤色顔料など、コンテナ17箱分であった。

## 3. 層位と旧地形

調査区の層位については、調査区の南壁と東壁の上層図を作成している。それらは、調査区壁際の遺構を報告する際にあわせて提示するとし、ここでは調査区全体の基本層序を確認しておきたい。

東半部では、調査以前より東へ緩傾斜していたが、畑の耕作上（表上）が西に薄く、東に厚くなっている。西寄りでは耕作上直下に鳥栖ローム、東寄りでは暗茶褐色包含層、黒色包含層、さらに一部では淡茶色粘質土（新期ローム）を挟んで鳥栖ローム層となる。尾根の頂部に近い西寄りでは若干削平されているが、東側では遺構が良好に遺存している。調査以前、調査地東半部の北側の宅地や東側の道路が畠より1m以上低かったため、切り下げられているものとみていたが、実際は逆に耕作土が厚くなっていた。

西半部では、表土である客土の直下が鳥栖ローム層となっていた。現況での地表は東半部より高かったが、遺存ローム層上面は西から東へ緩傾斜していた。西端では地表下0.1m程度でロームの地山に当る。北側隣接地（調査地点より1段低い）近くでロームが深く削られており、調査地東半部との境界近くでも削られて傾斜が急になっている。

西半部と、東半部の西端では、鳥栖ロームのひび割れが顕著であるが、ロームが乾燥していることによると考えられる。

## 4. 旧地形

第58次・76次・94次調査の成果と今回の調査所見から、尾根の頂部が削平を被っていることは確かだが、斜面部分は旧地形をかなり反映しているようである。また、周辺の旧地形も、現在の地形によく反映されているとみてよからう。道路のさらに東側では、過去の試掘調査でも、遺跡は確認されていない。

丘陵の稜線は、削平された西半部ではやや不明瞭だが、調査地西半部南壁から、調査地西半部・東半部・北側隣接地の接する地点付近を通り、東半部北壁に抜けるものとみられる。そうすると、1973年の石棺墓出土地点は丘陵稜線上か、東斜面に位置することとなろう。

## 5. 旧石器時代の遺物

調査区内では、弥生時代・古墳時代の遺構の覆土から黒曜石片が検出され、また、東半部には旧石器時代包含層が一部遺存しているとみられていた。実際、円形周溝墓SO-120付近の包含層から黒曜石片が見出されたこともあった。しかし、梅雨や台風通過の後、黒曜石などが洗い出されるといったこともなく、包含層の遺存もごくわずかであると判断されたので、調査期間の都合から、旧石器時代の調査は断念した。

弥生時代以前に所属するとみられる遺物には、黒耀石、安山岩を素材とする石器類があるが、大半が後世の造構や擾乱内から出土したものであり、層位的に時期を知ることは困難である。石器類の器種、形態、剥離技術から旧石器時代のものと、縄文時代後期後半から晩期前葉のもの、さらに弥生時代中期に所属すると考えられるものである。ただし、縄文・弥生時代のものは、剝片と二次加工のある剝片が数点ずつあるに過ぎない。ここでは、定形石器を含み、類例の少ない資料を含む旧石器時代の石器類7点について報告する。

10001は、溝状造構SD-021東側検索面で出土したナイフ形石器である。新規ロームが遺存していた地点なので、石器も同層に属すと考えられる。漆黒色不透明の黒耀石を素材とする。表面の風化はやや進んでいる。基部を欠損し、現状で幅1.3cm、長さ2.7cm、厚さ0.3cmを測る。素材は縦長剝片であり、打点を基部側としている。a面左側側面の先端と基部側にプランティングが施されている。

10002は、円形周溝墓SO-130の周溝SD-430の覆土上から出土した細石刃核である。漆黒色不透明の黒耀石を素材とする。表面の風化は進んでいる。幅1.4cm、長さ2.5cm、高さ1.6cmを測る。甲板面dは石核素材の主要剝離面であり、素材は分厚い縦長剝片と見られ、素材の先端部には自然面が残っている。細石刃剝離面は素材の打点側を利用している。石核調整は甲板面と基底部からおこなっている。基底部から石核調整は側面aのみに見られる。甲板面には細石刃剝離面側を主に研磨状の擦摩痕があり、擦りガラス状となっている。また、両側面にも僅かな擦摩痕がある。細石刃剝離底は5面残り、両側の2面が最終剝離であり、その後中央部に幅0.7cmの階段状剝離が発生し、作業を中止している。

10003は、円形周溝墓SO-120の隣構SF-422付近の新規ロームから出土した二次調整のある剝片である。安山岩を素材とする縦長剝片であり、表面の風化はやや進んでいる。背面の剝離から打面両設の石核とみられた。先端部を欠損し、現状で幅1.9cm、長さ6.5cm、厚さ1.6cmを測る。両側辺に鋸歯状の調整があり、削器的な用途が考えられる。

10004は、円形周溝墓SO-140の周溝SD-440の覆土から出土した二次調整のある剝片である。漆黒色不透明の黒耀石を素材とする不定形剝片であり、表面の風化は進んでいる。先端に自然面を残し、完形品で幅2.6cm、長さ7.1cm、厚さ1.1cmを測る。両側面に刃こぼれ状の微細剝離が認められる。主要剝離面には線状の使用痕がある。

10005は、粘土貯蔵穴SU-790覆土から出土した二次調整のある剝片である。黒色半透明の黒耀石を素材とする。表面の風化はやや進んでいる。完形であり、幅2.4cm、長さ2.7cm、厚さ0.4cmを測る。先端には自然面があり、そこに刃こぼれ状の微細剝離が認められる。

10006は、粘土貯蔵穴SU-790覆土から出土した剝片である。漆黒色不透明の黒耀石を素材とする縦長剝片である。表面の風化はやや進んでいる。幅1.5cm、長さ2.7cm、厚さ0.6cmを測る。背面に自然面が残る。

10007は、円形周溝墓SO-110周溝SD410と豎穴住居跡SC-710とを横断するサブトレンドで出土した剝片である。漆黒色不透明の黒耀石を素材とする不定形剝片である。表面の風化はやや進んでいる。完形で、幅1.8cm、長さ2.5cm、厚さ0.4cmを測る。背面には周囲からの剝片剝離痕が残る。

本調査地区の旧石器時代資料は、細石刃段階とナイフ形石器段階の二時期に区分される。資料が乏しく詳細は不明であるが、細石刃核は広義の「船野型細石刃核」に所属するとみられる。単品のために組成や所属時期は明確でないが、市内蒲田遺跡や春日市門田遺跡の楔形細石刃核に先行する時期と予測される。ナイフ形石器はさらに位置付けが困難である。縦長剝片を利用していること、他の二次調整のある剝片、剝片も伴うとすれば、後期旧石器段階後半でも新相に位置付けられよう。

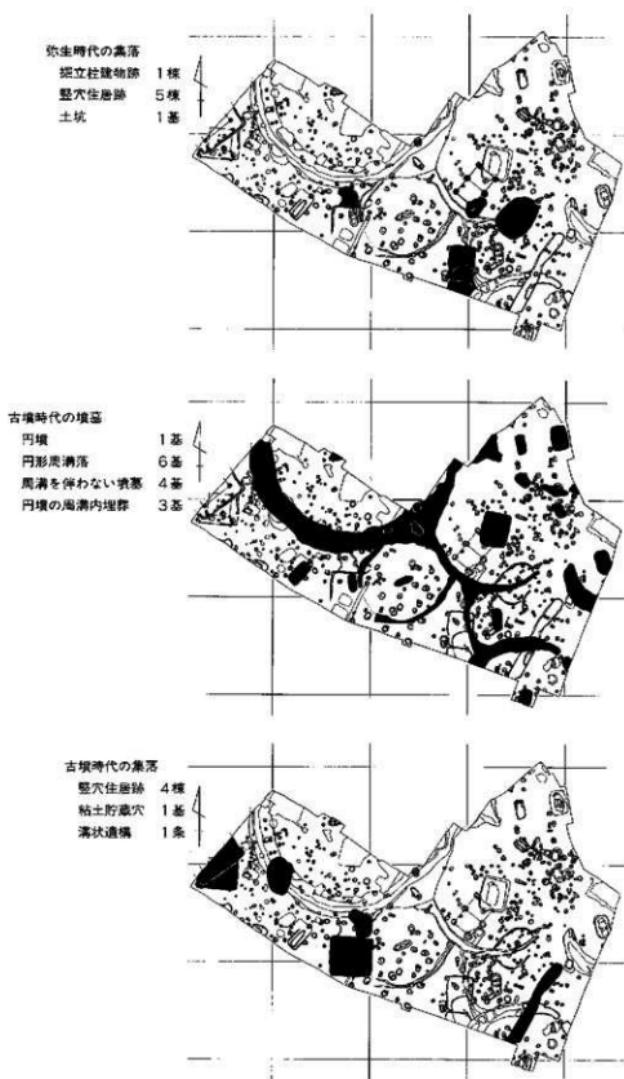


Fig. 3 遺跡の変遷 (1/500)

## 6. 弥生時代の集落と出土遺物

弥生時代の遺構は主に調査区東半部、台地の東斜面で検出された。頂上部はやや削平と擾乱を受けているが、いくつかの遺構の遺存が確認された。

### (1) 摺立柱建物跡 (S B)

SB-910 (Fig.5)

調査区東半部の尾根稜線近く、標高6.5~6.7m地点に所在する。2間×1間の建物跡であり、北東-南西 (N-42°-E) 長軸で、桁行3.60m、梁間2.25mを測る。周辺に、建物に併いそうな地山整形はみられない。柱穴の覆土は黒色土であり、柱穴の底は標高5.97~6.25mである。柱穴SP-9101が土坑SK-044を切り、柱穴SP-9103、SP-9106が豎穴式石室SQ-141墓壙に切られる。

SB-910は弥生時代中期から古墳時代前期のうちに位置づけられる。

### (2) 豊穴住居跡 (S C)

5基が検出された。いずれも古墳や周溝墓の周溝に切られ、浅く遺存している。いずれも出土遺物や形態などから、弥生時代中期ごろと推定できる。

SC-700 (Fig.6)

調査区中央南西寄り、標高7.3m地点に所在する不整形住居跡である。SC-750、SC-760、円墳周溝SD-450に切られる。東西2.2m以上、南北2.1m以上、残存する深さ0.15m(床面の標高7.2m)を測る。主柱穴、壁溝、貼床などは確認できない。SP-8052には弥生土器高杯20001が廃棄されていた。

高杯20001は内外面に赤色顔料が施されている。

SC-720 (Fig.6)

調査区東半部の斜面、標高6.2~6.5m地点に所在する。周溝墓SO-140の周溝SD-440に切られる。検出面では床面の3分の2程度しか認められなかった。包含層中に床面が遺存していた可能性はあるが、調査の手順上、確認できなかった。長軸を南北方向 (N-50°-E) に向けた小判形の住居跡である。長軸4.5m、短軸3.4m、残存する深さ0.3m(床面の標高6.23~6.42m)を測る。主柱穴として、SP-7256、SP-7254が認識される。壁溝内の浅いビットSP-7201、SP-7202、SP-7203、SP-7204も、住居に何らかの関係があるかもしれない。壁溝はほぼ全周する。貼床は認められなかった。また、住居中央に炉が存在したかもしれないが、SD-440のため床がえぐられており、確認できなかった。覆土は黒色土であった。

壺20002は検出面から出土したもので、摩滅が顕著である。

SC-710 (Fig.7)

調査区の南壁寄り、標高6.65~6.85m地点に所在する。円形周溝墓SO-110の周溝SD-410、ビットSP-7152に切られる。検出面から床面までの深さが浅く、切り合いもあって、遺存状態はあまりよくない。長軸をほぼ南北に向けた長方形の豎穴住居跡である。南北3.6m以上、東西2.7m、残存する深さ0.2m(床面の標高6.55~6.70m)を測る。主柱穴、壁溝、貼床は認識できない。

SP-7152付近の床面で壺20004と底部20006など、弥生土器片が出土した。壺20004と底部20006は胎土が異なり、別個体である。弥生土器には、後期以降とみられるものはない。

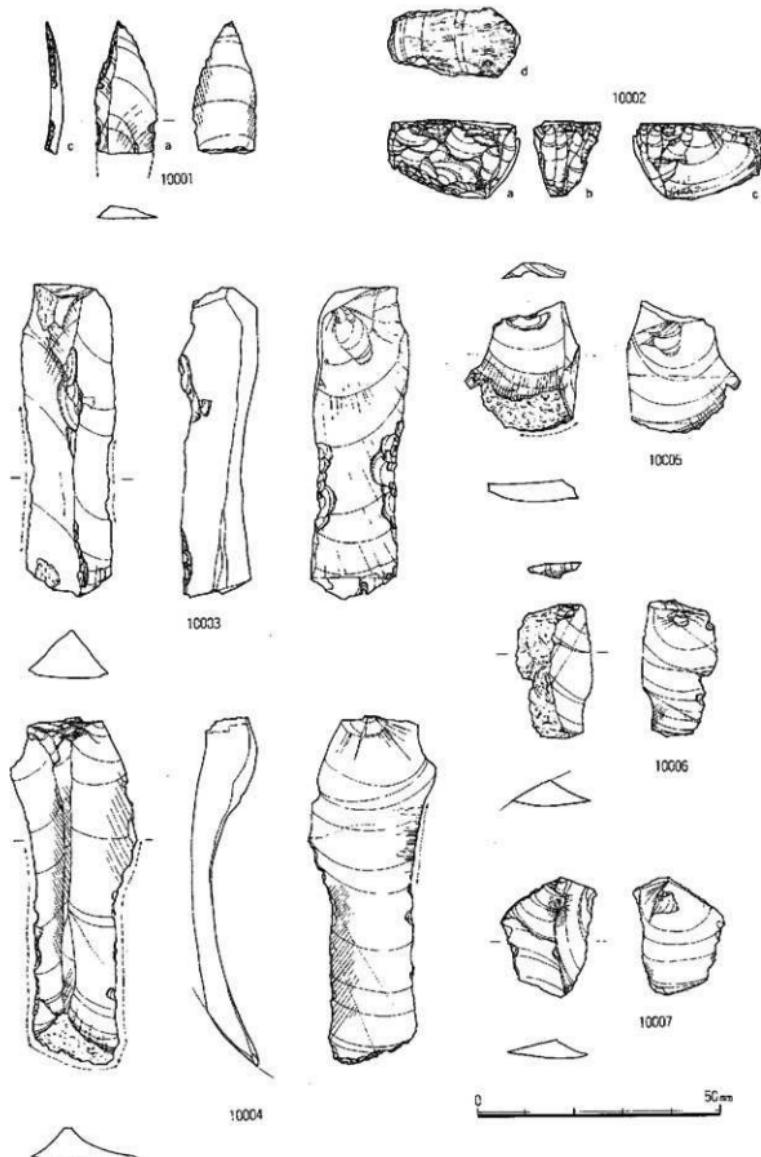


Fig. 4 前石器時代の遺物 (1/1)

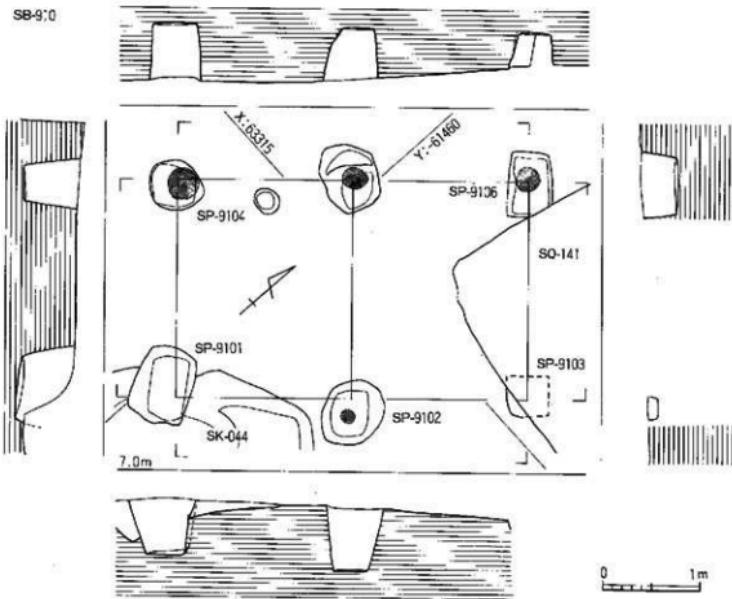


Fig. 5 SB-910 遺構実測図 (1/50)

#### SC-730 (Fig.7)

東斜面の調査区南端、標高6.8m地点に所在する。竪穴住居跡SC-740を切り、円形周溝墓SO-120の周溝SD-421に切られる。浅く遺存している。おそらく南北長軸の長方形または方形の竪穴住居跡であろう。南北1.4m以上、東西2.7m以上、残存する深さ0.2m(床面の標高6.62m)を測る。主柱穴、整清、貼床、かは認められない。覆土は、黒褐色粘質土で、ローム粒子と砂粒を含む。

床面から出土した遺物はない。

#### SC-740 (Fig.8)

東斜面の調査区南端、標高6.7m地点に所在する。竪穴住居跡SC-710を切り、SC-730、円形周溝墓SO-110、SO-120の周溝SD-410、SD-421に切られる。長軸を南北方向(N-22°-W)に向かた長方形の竪穴住居跡である。長軸3.1m以上、短軸2.2m以上、残存する深さ0.3m(床面の標高6.47m)を測る。SP-7451が主柱穴であろうか。壁溝、貼床、炉などは確認できなかった。

覆土中より土器片20007、20008などが確認されたが、これらは壁近くで内方に傾いて検出されており、住居跡の埋没時に入り込んだものと思われ、住居跡埋没時点の上部を画する遺物といえよう。ただし、そのうち1点は須恵器を模倣したと思われる、回転ヘラケズリされた土師器杯20008である。しかし、住居跡の形状や切り合いからみて、この土師器杯がSC-740に伴うとは考えがたく、小ピットが切っていたか、包含層の最下部に入っていたものが検出面で出土したと考えられる。

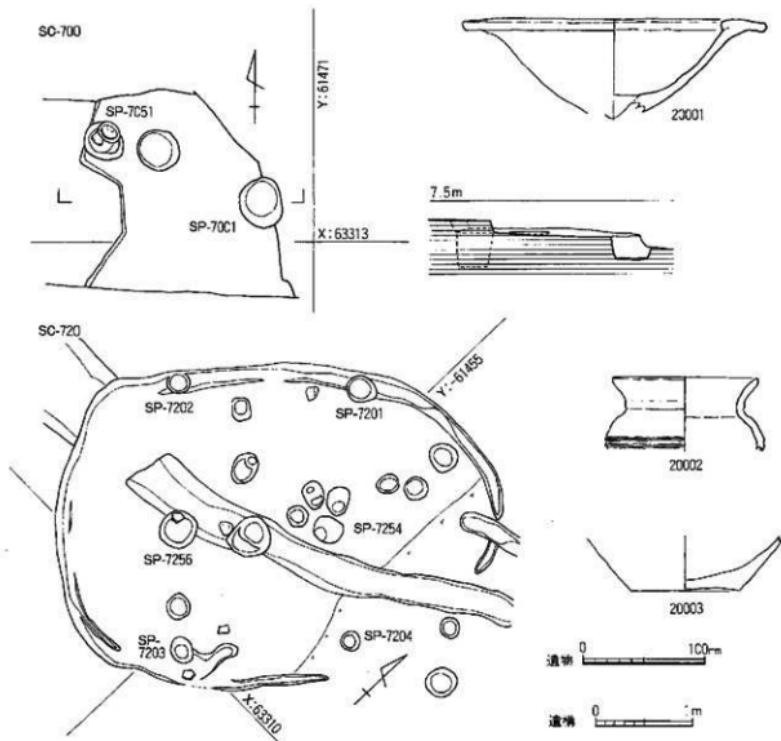


Fig. 8 SC-700, 720 造構・遺物実測図 (1/50, 1/4)

### (3) 土坑 (SK)

SK-044 (Fig.8)

調査区の東斜面、標高6.6~6.7m地点に所在する。掘立柱立物跡SB-910の柱穴SP-9101、円形周溝墓SO-140の周溝SD-440に切られるが、遺存状態はよい。長軸を北東-南西方向 (N-49°-E) にとる情円形の土坑である。底は北東側が1段高くなっている。長さ2.54m、幅1.46m、残存する深さ0.5m(底面の標高6.19m)を測る。

土坑の底面近くでは、上器が廃棄された状態で出土した。弥生土器であるが、いずれも摩滅が顕著である。

廃棄された土器より、SK-044は弥生時代中期に位置づけられる。柱の抜取り跡としても、あるいは櫛目柱墓の跡としても、周辺に類似の造構がないため、疑問が残る。また、櫛目柱墓とした場合、掘立柱建物を造営する以前に櫛目柱が抜き取られ、埋没を終えていたことになり、想定しにくい。

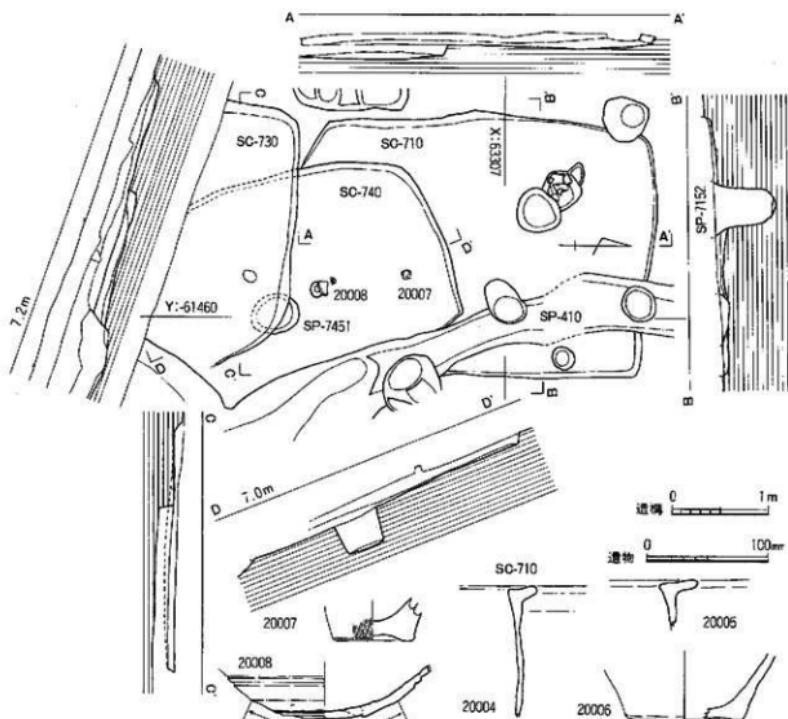


Fig. 7 SC-710, 730, 740 造構・遺物実測図 (1/50, 1/4)

## 7. 古墳時代の墳墓群と出土遺物

古墳時代の造構は調査区の全域で確認された。大きく分けて、5世紀頃の墳墓群と、6世紀頃の集落からなる。そのため、時期・性格の異なる两者を分けて記述する。

墳墓群のうち円墳・周溝墓は、周溝に区画された残丘により認識し、残丘毎にSO-110, SO-120, などと命名した。円墳と周溝墓との間に、命名上の区別はつけなかった。主体部は残丘名と墳墓の形式に応じてSR-111, SQ-131, などとし、周溝はSO-110に対しSD-410のように命名した。このほか、関連構や残丘上造構、周溝内造構も残丘名や周溝名に応じた造構番号を与えた。周溝を伴わない墳墓には、別に独自の番号を与えた。

円墳・周溝墓が周溝を共有したところがあり、埋没以前の周溝に別の周溝を連結していることが推察された。築造順序を明らかにするためには、溝底のわずかな自然埋没土を別の周溝が切るという現象を捉えるべきであり、周溝覆土を少しづつ掘り下げてその都度覆土上を観察するという方法を取った（この点、福岡市埋蔵文化財センター吉留秀敏氏の助言を得た）が、周溝間の切り合いをこの方法で正確に捉えることには成功しなかった。

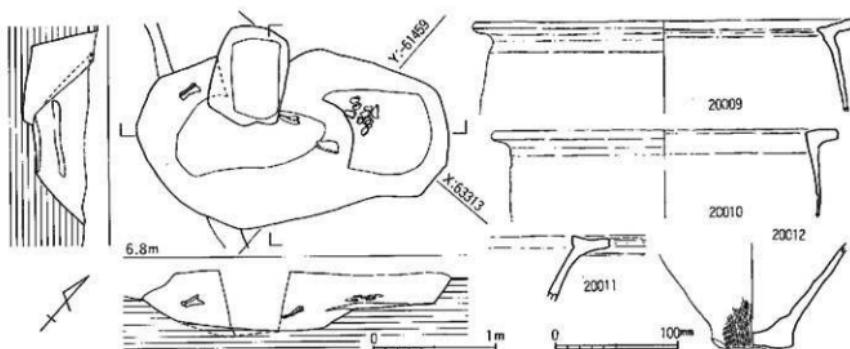


Fig. 8 SK-044 造構・遺物実測図 (1/40, 1/4)

### (1) 円墳 (SO)

SO-150 (Fig.9~12, PL.2)

調査区の西半、標高7.4m地点に所在する。SD-450により区画される。残丘中央に木棺墓SR-151が存在するが、SO-150の主体部として確実とはいえない。主体部は北側隣接地中に中心をもつはずである。周溝SD-450は隣接する円形周溝墓SO-160、SO-140と一部で共有されている。封土墳丘は遺存せず、周溝による残丘のみの遺存であるが、規模と周溝の断面形、また、周溝の底がSO-150のみ水平に近いことから、円形周溝墓との間に一定の格差があると判断し、SO-150を占墳と見做した。円墳であり、推定径は周溝底で19.0m、検出面で16.6m、残存する周溝底からの残丘高0.7mを測る。周溝以外の地山整形は確認できない。周溝を切る古墳時代住居跡はあるが、周溝の内側には住居跡がないことや、周溝の規模からみて、本来は高さ3m程度の封土墳丘が存在したものと考えられる。

周溝 周溝SD-450は、南側半周程度のみを調査したが、本来はSO-150の周囲を全周するらしい。古墳時代後期(6世紀後半)の竪穴住居跡SC-760、粘土貯蔵穴SU-790に切られるが、遺存状態はよい。弧をなして延び、地形に逆らって平坦な底面を有しており、断面逆台形をなす。検出面での幅2.0~2.6m、残存する深さ0.3~0.6m(溝底の標高6.3~6.7m)を測る。覆土は上層で黒褐色粘質土、下層で暗赤褐色粘質土であり、水の流れた様子はない。東側で小さな突出があり、造り出しのようにみえるが、これは後述の柾棺墓ST-452の造営により墳壠が乱れたのであり、特殊な施設とはいえない。

周溝内の東南部に、周溝内埋葬かと推定される柾棺墓ST-452、土棺墓ST-453、石棺墓ST-454が検出された。これはSD-450と、円形周溝墓SO-140、SO-160の共有する周溝SD-440が合流する地点(3基の墳墓が接する地点)に集中しており、次に述べる赤色顔料廃棄の行為とともに、墳墓群を営んだ集団が、墳墓の主人公の間の紐帶を重視していたことを示すものであろう。

赤色顔料の廃棄は周溝中の2か所で確認された。

西端部溝底より、赤色顔料を内蔵する土師器丸底小壺20014と、それを覆う土師器壺破片20013が出土した。壺20013は本来の器形とは矛盾した配列で重なって出土しているが、壺破片の内面や断口にも赤色顔料が付着していることからみて、赤色顔料を満たした小壺20014を覆うために、破損した土師器

壺20013を意図的に用いたとみられる。

周溝東南部の、SD-440との分歧点近くでも、赤色顔料を入れた上師器壺20017が、口縁部に土師器壺20016をかぶせた状態で出土した。残丘反対側の斜面に接した状態であった。壺20017は口縁部まで赤色顔料が満たされていた。また、あふれだした赤色顔料のため、1方向のみ、赤色顔料が流れた跡が外面にも残っていた。壺20016内面底部には、壺20017の口径の範囲で赤色顔料が付着し、やはり1方向のみ赤色顔料が口縁部まで流れた跡があった。

赤色顔料はいずれもベンガラであることが、本田光子氏（別府大学）により確認されている。

検出面からは須恵器片も出土したが、古墳時代後期の集落からの混入であろう。

主体部 SR-151は、残丘中央と推定される調査区西半部北壁を拡張して検出した。標高7.1m地点に所在する。切り合はないが、北側隣接地との境界のブロック堤に続いている。主軸を北東-西南方向（N=52° E）にとる木棺墓である。長さ0.96m以上、幅約0.9m、残存する深さ0.15m（底面の標高6.85m）を測る。棺底には木棺を固定するための溝状の掘り込みが壁寄りにみられる。墓壇壁面はほぼ直立している。墓壇内の覆土は黒色土にロームブロックを含む土であった。棺内に石材がみられたが、石材周囲にのみ砂がみられ、石材は木棺とは無関係とみられる。副葬品はみられない。

覆土中より弥生土器の小片が出土したが、遺構に伴うとは考えがたい。

時期 周溝出土土師器から、布留式新段階の最も古い部分、4世紀末ないし5世紀初め頃にSO-150の築造時期が求められる。これは周溝内埋葬の壺棺墓ST-452の時期とも矛盾しない。SO-150は台地尾根上の最も優位な立地であり、その規模からも、この墳墓群で最古の時期に置くことができよう。すなわち、以下に述べる周溝内埋葬や円形周溝墓、周溝を伴わない墳墓も、台地上にSO-150が存在することを前提として築造されたと考えられる。

また、周溝を切る古墳時代住居跡はあるが、周溝の内側には住居跡がない状況や、周溝SD-450上層に設置された粘土貯蔵穴SU-790が同時期の竪穴住居跡よりもやや深いことからみて、6世紀に集落が展開した時点で、周溝はかなり埋まって機能も忘れていたが、埴丘は遺存していたはずであり、したがって、墳墓群の形成はそれ以前に終了していたといえる。

## (2) 円墳の周溝内埋葬 (ST・SR・SQ)

周溝内埋葬は東南部の、円墳SO-150と円形周溝墓SO-140、SO-160が接する位置にある。いずれも法量が小さく、小児を埋葬したものと思われる。

### ST-452 (Fig.13, PL.3)

調査区の端、標高6.4m地点に所在する壺棺墓である。周溝調査中に口縁部の一部と墓壇の輪郭の一部を検出し、調査区を拡張して調査した。円墳周溝SD-450最下層のみを切る。遺存状態は良好である。壺形土器20018のみがほぼ垂直（埋置角90°）に墓壇内に立てられた単棺の壺棺墓であり、石・土器などの、蓋に該当する遺物はみられず、棺内の覆土も棺外のそれと大差なく、もとより蓋がなかったか、有機物による蓋がされていたと思われる。壺棺20018には穿孔などの再加工はみられず、埋葬後の破損



Fig. 8 SO-150 造構断面実測図 (1/100)

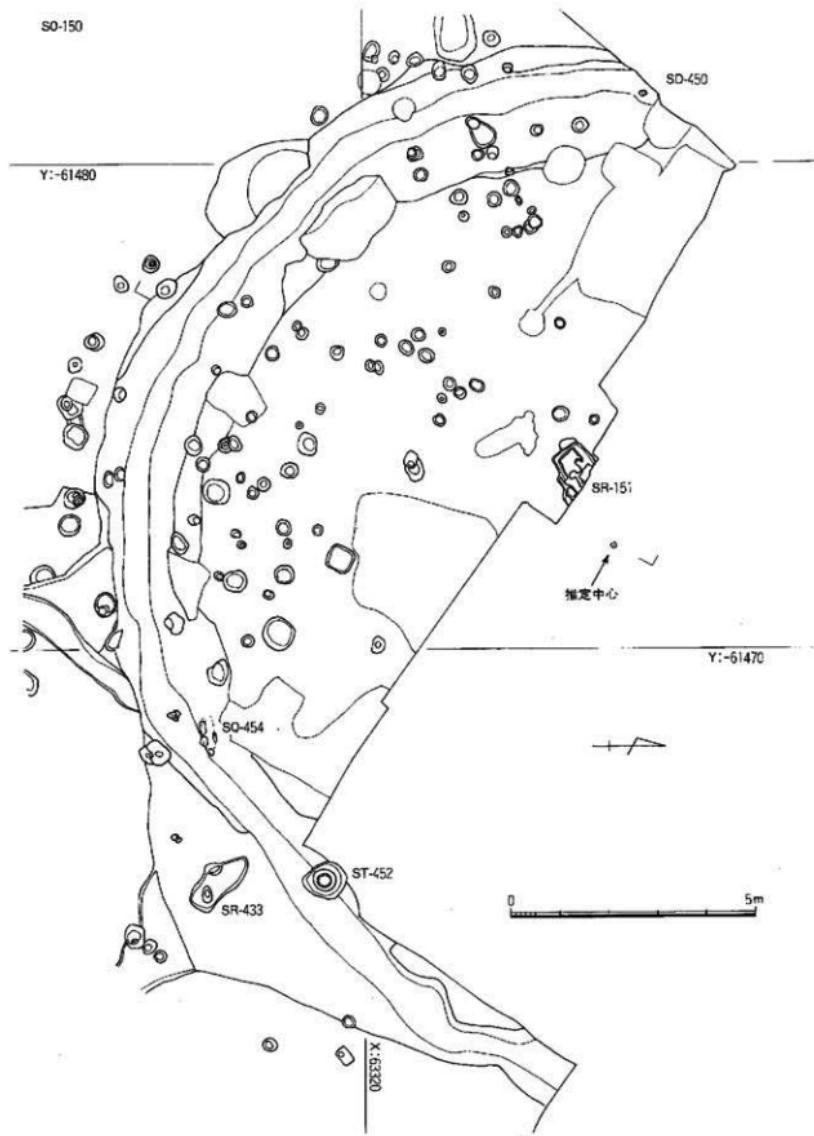


Fig. 10 SO-150 遺構平面実測図 (1/100)

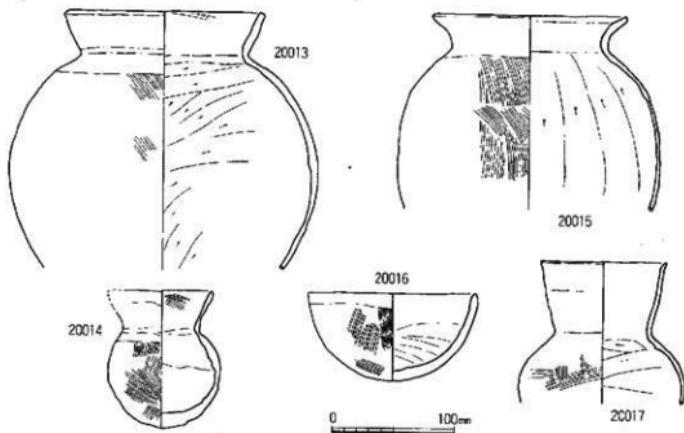


Fig. 11 SD-450 出土遺物実測図 (1/4)

もしていない。棺内・墓壙内とも、下層はロームを多く含む赤褐色土、上層は黒色土となっている。副葬品などはみられなかった。墓壙は、壺棺を据えた中央のみを深く掘り留めており、径0.75~0.91m、残存する深さ0.65m(底面の標高5.86m)を測る。

壺棺20018は完形完存の壺形土器である。全体にハケ調整されている。穿孔など、焼成後の加工はみられないが、底部に数か所、焼成時のものとかと考えられる剥離が見られる。完存のため、底部付近の器壁の厚さは測定できないが、かなり厚く、壺は持つとかなり重い。器高590mm、口径280~290mm、胸部最大径472mmを測る。

ST-452は布留式新段階の最も古い部分、4世紀末頃に位置づけられる。

#### SR-453 (PL.3)

SD-450とSD-440との合流点、標高6.3~6.5m地点に所在する。円形周溝墓SD-450の最下層のみを切る。遺構があると確認した時点が遅く、調査したのは墓壙の最下層のみであった。主軸を北西-南東方向(N-40°-W)にとる不整形の土壙墓である。長さ1.5m、幅0.6m、残存する深さ0.06m(底面の標高6.27m)を測る。南東側で幅が広く高い。覆土はロームブロックを主体とし、若干の黒色土を含む。木棺などの痕跡は確認されなかった。形状、法量からみても、土壙墓であろう。副葬品はみられず、覆土中からわずかに土器片が出土した。南東が頭位方向であろう。

#### SQ-454 (PL.3)

円墳周溝SD-450の残丘側斜面、標高6.7m地点に所在する。周溝覆土最下層の赤褐色土と、その上の茶褐色土を切る。遺存状態はよい。主軸を東西(N-81°-E)にとる木蓋石棺墓である。覆土中に造営されているため、墓壙を捉えることはできなかった。墓壙内の端に灰白色粘土を盛って石材を支え、石棺を構築している。側壁・小口の石材は板石で、側壁は南側2枚、北側1枚以上、小口は東側1枚を用いている。西側小口は石材が遺存しておらず、法量などを確定できない。石材に赤色顔料は施さない。長さ0.6m程度、幅は0.1m程度を測る。棺底は一部に灰白色粘土がみられるのみで、全面にはおよばず、意図的に棺床を設営したものか、明確でない。墳体の崩落により棺内に落ち込んだものとみられる。副葬品はみられず、そのほかの出土遺物もない。頭位方向も不明である。蓋に当たる遺物はみられず、

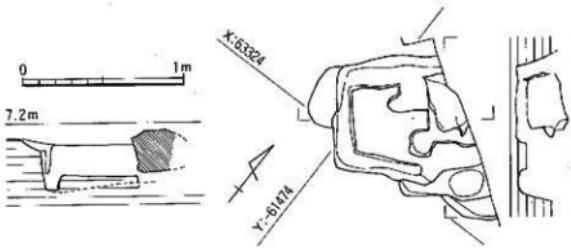


Fig. 12 SR-151 造構実測図 (1/30)

壁体上には木蓋をかぶせたものと思われる。後に述べる木蓋石棺墓SQ-003の小型のものと考えたい。

SQ-454は円墳SO-150に從属する周溝内埋葬とみられるが、最下層のみならず、その後の堆積も切っていることから、5世紀前半ごろと推定される。

### (3) □形周溝墓 (S O)

周溝墓は調査区東半部で6基が検出された。

#### SO-110 (Fig.14, PL.4)

調査区の東斜面、標高6.3~6.7m地点に所在する。周溝SD-410, SD-421, SD-440により区画され、石蓋土壇墓SR-111を主体部とする。ただし、周溝SD-421は隣接する円形周溝墓SO-120と、周溝SD-440は隣接する円形周溝墓SO-140と共有されている。周溝は全周せず、特に東側は既に尖われたらしく、正確な残丘形状は捉えがたいが、円形周溝墓と思われる。残丘は周溝底で南北5.5m、検出面で南北5.3m、残存する周溝底からの残丘高0.63mを測る。周溝・主体部以外の地山整形は確認されなかった。ローム層上面の検出面より上は周溝内外とも茶褐色粘質土(包含層)が統いており、周溝土層断面からも、封土による墳丘は看取されなかった。主体部の遺存状況からみても、封土はなかったか、ごく薄い封土であったと思われる。

周溝 周溝SD-410は、SO-110の西を画する。豎穴住居跡SC-710, SC-740を切り、浅く遺存している。南北方向に延び、中央では細く浅く、南北のSD-421, SD-440と合流する部分で広く深くなっている。断面は緩いV字形を呈し、残丘側(東側)斜面が緩く、残丘反対側(西側)斜面が急である。検出面での幅0.3~1.4m、残存する深さ0.10m(溝底標高6.58m)を測る。覆土は黒褐色粘質土であり、上器片を多く含む。水の流れた様子はない。土器の廐棄行為などはみられなかった。

周溝SD-421については円形周溝墓SO-120とともに、周溝SD-440については円形周溝墓SO-140とともに記述することとし、SD-410とSD-421, SD-410とSD-440との先後関係にのみ触れる。既に述べたとおり、SD-410はSD-421, SD-440に近くなると深く広くなる。SD-421はSD-410との合流点で深くなるが、これは陸橋SF-422の存在により、この位置だけ深く残ったためである。SD-440は、SD-410との合流点で特に形状を変化させることはない。これは、SD-410掘削の際はSD-421, SD-440の存在を意識しているが、SD-421やSD-440の掘削の際はSD-410の存在を意識していないことを示す。すなわち、SD-410はSD-421やSD-440よりも後に掘削されたものであり、円形周溝墓SO-110をSO-120, SO-140よりも後に築造した際、既存の周溝SD-421, SD-440をSD-410でつなげて周溝としたものと考えられる。また、SD-421, SD-440の平面形が、SO-110側に凸であることから、築造順序を示している。

SD-421とSD-440の間は周溝が続かないが、陸橋としては広すぎるようである。この地点はSO-110の

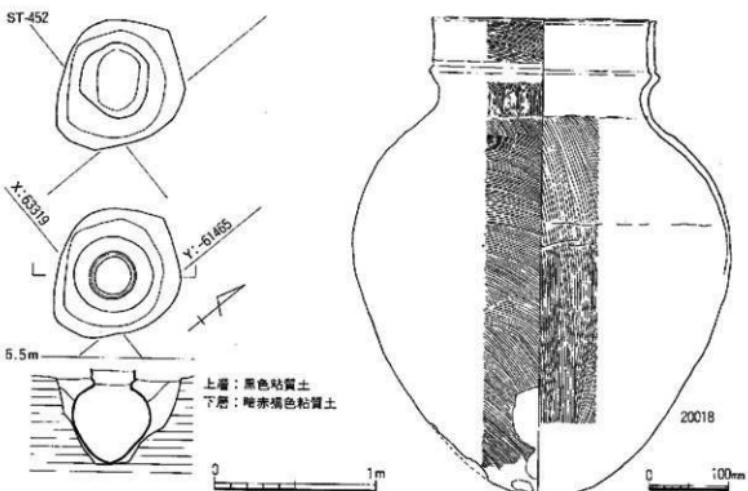


Fig. 13 ST-452 造構・遺物実測図 (1/30, 1/6)

東側に当たり、地形的に最も低い。陸橋が存在した可能性はあるが、周溝墓造営時の地形上の制約から溝底が包含層中にとどまっていた可能性もある。

主体部 SR-111は、SO-110の残丘中央、標高6.5~6.6m地点に所在する。ピットに切られた部分もあるが、遺存状態はよい。2段掘りの墓壙を持つ石蓋土壙墓である。墓壙は南側で幅の広い隅丸長方形を呈し、長さ2.13m、幅0.96m、残存する深さ0.35m（底面の標高6.3~6.4m）を測る。墓壙の中央に位置する埋葬部は南側で幅の広い狭長な隅丸長方形を呈し、上面で長さ1.69m、幅0.58m、底面で長さ1.58m、幅0.40m、深さ0.4m（底面の標高5.98m）を測る。壁面は崩落により傾斜がついているが、崩落していない部分からみると、本来はかなり切り立った状況を示していたとみられる。埋葬部の主軸を南（S-6°-E）にとる。南小口寄りの底面に微かに赤色顔料が観察された。埋葬部の形状からみても、南が頭位と推定される。埋葬部内に副葬品は認められなかった。埋葬部内に粗砂層が薄く堆積しており、人為的に被せたものとみられる。粗砂層の上に堆積したロームブロックは、壁面の崩落によると判断された。ロームブロック層と蓋石の間には空間が残っていた。木棺の痕跡は認められなかった。蓋石は板石3枚を基本とし、隙間を小割石で塞いでいる。周溝SD-421に廻棄された石材は、SR-111蓋石に用いる予定の石材が余ったのかも知れない。蓋石の上に灰白色粘土を塗りつけて蓋石を固定しているが、目地の間にはおよんでいない。灰白色粘土は西寄りでは棚状に盛り上げている。蓋石下面全体に赤色顔料を塗布している。覆土は棺蓋上上層ではローム粒を含む黒褐色土であり、その下に人為埋没土と思われる茶褐色粘質土、暗黄褐色粘質土がある。

棺蓋上覆土の検出面で須恵器蓋天井部破片が出土したが、造構に伴うとは考えられない。

小結 SO-110自体に時期を確実に示す証拠はみられないが、主体部が石蓋土壙墓であること、周溝を共有する周溝墓SO-121、SO-141との関連から、5世紀前半頃と推定される。

SO-120 (Fig.15~17, PL5)

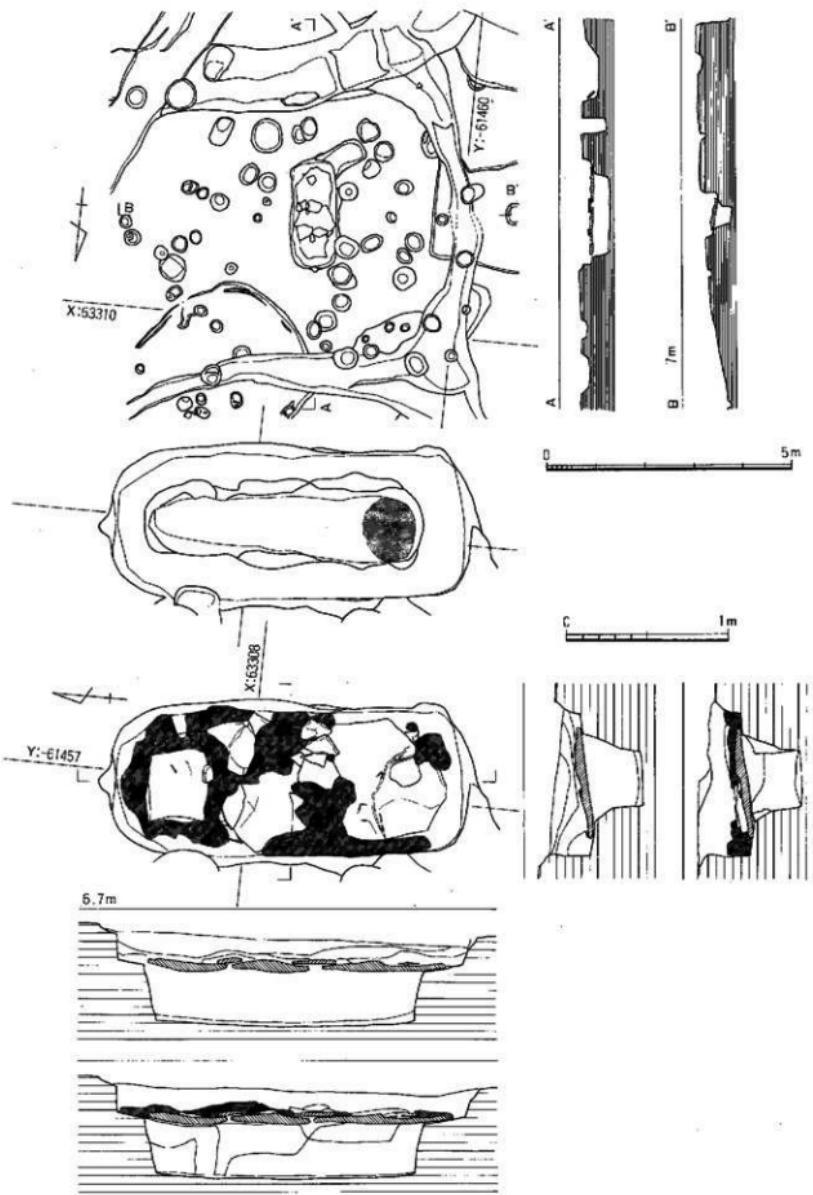


Fig. 14 SO-110 造構実測図 (1/100, 1/30)

調査区の東南隅、標高5.9～6.6m地点に所在する。周溝SD-420、SD-421により区画され、木棺墓SR-121を主体部とする。ただし、周溝SD-421は隣接する円形周溝墓SO-110と共有されている。周溝SD-421が溝SD-021に切られるが、遺存状態はよい。円形周溝墓であるが、調査区内には全体の3分の1弱のみが属する。調査区南壁土層に、周溝内側でしか確認されない厚さ最大0.08mの灰黄色粘質土（ローム粒を含む）が確認されており、封土による墳丘の名残と考えられる。残丘は周溝底で径約13.5m、検出面で径約10.5mと推定される。残存する周溝底（標高5.78m）から、墳丘と推定される層の最高所（標高6.66m）までの高さ0.88mを測る。

周溝 SD-420は、SO-120の東を画していたと思われ、大半が東壁外に位置する。ごく浅く遺存し、断面は緩いV字形を呈する。検出面での最大幅1.25m、残存する深さ0.25m（溝底標高5.78m）を測る。覆土は黒褐色粘質土であり、下層はロームを主体とする弱粘質土である。覆土中から土器小片がわずかに出土した。

周溝SD-421は、SO-120の北を画し、南壁に消える。豊穴住居跡SC-730、SC-740を切る。SD-410と合流するが、SD-421が先行することは既に述べた。溝SD-021に切られるが、遺存状態はよい。弧をなしで伸び、断面逆台形をなす。溝底は地形により上下する。検出面で最大幅1.66m（南壁）、底面で最大幅0.79m、残存する深さ0.36m（溝底標高6.05～6.32m）を測る。覆土は黒褐色粘質土であり、最下層にローム混じりの灰褐色土がみられる。水の流れた様子はない。覆土中から管玉破片と土器小片が出土した。SO-110造営時に余った石材が廃棄されている。

陸橋 SF-422は、主体部SR-121の北西側に位置し、周溝SD-421内に、検出面よりはやや低く残されている。平面形は方形、立面形は台形であり、周溝底からの残丘高0.20m、残丘検出面から陸橋上面までの深さ0.17m（陸橋上面の標高6.35m）、陸橋上面の長さ1.01m、幅0.90mを測る。検出面よりは低いが、中央が両岸近くの部分よりやや低いことからみて、ロームが流失したり、埋没後圧縮されている可能性も考慮すべきであろう。

SD-420とSD-421の間は周溝が続かず、陸橋となっている（SF-423）。この地点はSO-120の北東部に当たり、この円形周溝墓において最も地形の低い部分である。

主体部 SR-121は、SO-120の残丘中央とみられる、調査区南壁付近に所在する。当初の調査範囲の外に主体部の存在が推定されたので、調査区の拡張を行い、その際墳丘と推定された灰黄色粘質土上面で主体部を検出することができた。墓壙南端が検出できず、覆土を浅いピットが切っているが、遺存状態はよい。主軸を北北東（N-17°-E）にとる組合式木棺墓である。墓壙は南側で幅の広い隅丸長方形を呈し、検出面で長さ1.95m以上、幅1.3m、底面で長さ1.8m以上、幅1.1m、残存する深さ最深0.94m（最も低い位置で標高5.57m）を測る。墓壙中央東寄りに細長方形の台状部を作り出すように、東西は溝状、北側はピット状に掘り込んで、掘り込みの外側に純度の高いロームを貼り、棺材の設置を容易にしている。棺材は小口のみ石材を用い、下端をとがらせた板石をピットに差し込んで立て、両側と北側に小割石で詰めているが、棺内に当たる南側には小割石ではなく、小口板石の平坦面を棺内に向いている。側壁は墓壙内東西の溝に木の板材を立てたものとみられるが、側壁を設置する溝には底に若干の起伏がある。この溝の覆土を棺床の高さで切って観察すると、木材痕跡である灰茶色土が棺内の赤色顔料、棺外の灰白色粘土に挟まれている様相がみられるが、3者の関係が位置によって変化し、その変化と側壁設置溝の底の起伏がほぼ対応しているので、側壁板材は東側3枚以上、西側2枚以上を用いたとわかる。両側壁の北端は北小口石材周囲の小割石で止まっており、小口石材の設置が側壁構築に先行したことがわかる。木棺内法は長さ1.5m以上、幅0.5m以上を測る。棺床の標高5.96mである。

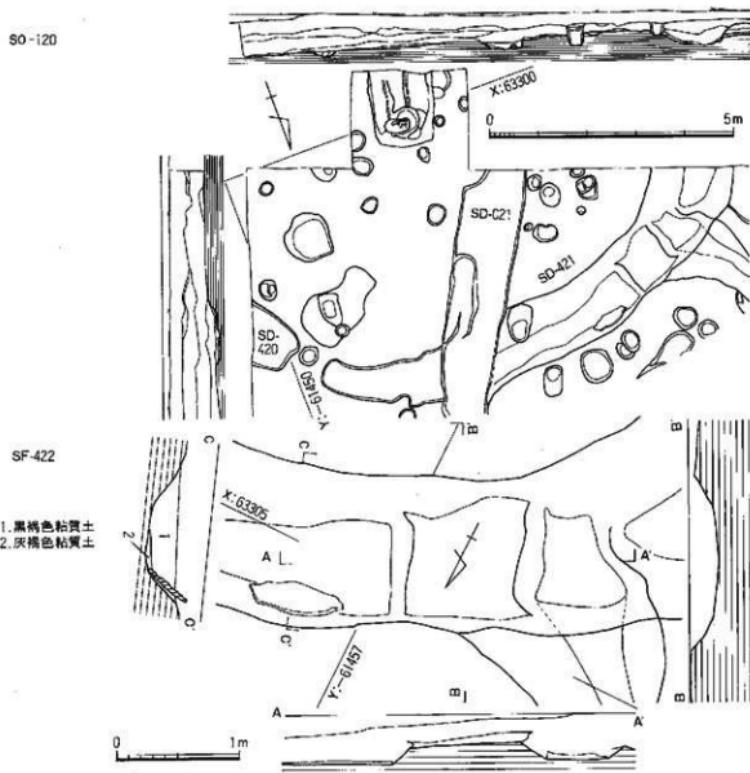


Fig. 15 SO-120 遺構実測図 (1/100, 1/40)

棺底はロームを貼って棺床とする。粘土棺床上に赤色顔料を薄く塗っていたかも知れないが、後に述べる赤色顔料の被覆との区別が難しい。副葬品の出上位置からみて、粘土棺床上、またはその上に薄く塗られた赤色顔料面上が埋葬面であろう。南側の棺床が幾分高いようであるが、はっきりしない。副葬品の配置などからみて、南が頭位であろう。副葬品上に赤色顔料を含む粘質土が被る。棺外に盛られたロームの上面に赤色顔料の落滴が2カ所認められ、棺外での赤色顔料はこの2カ所でしか確認されていない。棺床または副葬品上の赤色顔料を施す際、棺外はローム面まで構築され、被葬者安置時の作業面となっていたと考えてよからう。棺内の赤色顔料層上には薄い茶褐色土を挟んで平面的に灰白色粘土が検出された。この灰白色粘土層は、木蓋上に貼られた粘土が木蓋とともに棺内に落ち込んだものとみられる。この上にさらに薄い斜めの灰白色粘土層がみられる。この層は一定の角度で平面的にみられ、側壁の外側に貼られた灰白色粘土が、棺内に倒れ込んだ側壁板材とともに棺内に入り込んだものとみられる。側壁外面、木蓋上面に貼られた灰白色粘土がごく薄く平面的に観察されるることは、木材が余り腐朽せず、棺内に空間が残っているときに蓋や側壁が落ち込んだことを示す。棺外

は、ローム作業面上に灰白色粘土を盛り上げ、木棺の側壁外面・蓋上面も灰白色粘土で覆っている。ただし、墓壇西壁付近は灰白色粘土を施さない部分を溝状に残している。灰白色粘土を盛った部分だけをみると、木棺を中心に左右対称となる。西側の溝状施設の底には黒色土を主体とし、灰白色粘土ブロックを含む土が薄く堆積しており、木棺構築後、墓壇が開いたままの期間が存在した可能性も考えられる。蓋上の覆土は中央がやや縮まりのない暗黄褐色粘質土、外側が黄褐色粘質土である。

棺床上では、西壁寄りで銅鏡と勾玉、東壁寄りで管玉、勾玉、小玉、南小口寄りで勾玉と小玉が出土し、副葬品と思われる。南小口近くの小玉だけは棺床中央近くで出土し、この位置が被葬者の頸か頭頂に当たると判断できる。従って、南が頭位とみられる。頭位付近の東西の壁際では、手首付近のそれより大型の勾玉が1点ずつ出土したが、これは被葬者の耳に当たると思われる。西壁よりの銅鏡は左胸、勾玉群は左手首、東壁沿いの玉類は右手首に当たることになる。左手首に当たる勾玉29点は、糸に通して連なった状態で2群に別れて出土した。右手首に当たる玉類は、勾玉1点と小玉3点を繋り返し、1点だけ管玉を交えて糸に通したもの(表紙図参照)が、側壁設置溝内にややずり落ちた状態で出土した。左手首勾玉群と右手首勾玉群は側面形状が似ているが、左手首勾玉群はすべて丸みを帯びた造りであるのに対し、右手首勾玉群は2条の稜がめぐる平板な造りのものを含み、多様であり、両勾玉群の製作機会が異なることを示している。また、左手首勾玉群には破損や風化がみられないのに対し、右手首勾玉群は全体に風化が進んで脆く、破損した面に赤色顔料や土が付着したものもあり、副葬時既に破損していたことを示す。さらに、破損して頭部だけとなった勾玉を、小玉と同様に用いており、使用時から破損していたことは確実である。これらの事実は、右手首勾玉類が被葬者生前からの所持品であるのに対し、左手首勾玉群が葬送時に付け加えられたと推定させる。

銅鏡30001は薄く小型であり、鋸をめぐる4つの意匠は退化し、原形をとどめないが、一部は鋸側にギザギザや段を作り出している。図示した右半分は、紋様がなく、平板になっている。

SO-120を構成する造構からの出土遺物でこの周溝墓の時期を確定することは困難であるが、ほぼ5世紀頃と推定される。SD-421を切るSD-021の検出面からは6世紀頃の須恵器杯が出土しており、矛盾しない。墳墓群内の相対的序列としては、SO-110に先行すると推定されることは既に述べた。

#### SO-130 (Fig.18・19, PL.4)

調査区の東端、標高6.6m地点に所在する。SD-430により区画され、石棺墓SQ-131を主体部とする。ほかの円形周溝墓との周溝の共有関係はみられない。周溝SD-430が土坑SK-042に切られるが、遺存状態はよい。調査区内では周溝が6分の1周程度しか確認されないが、溝底の形状から円形周溝墓とみられる。残丘は周溝底で東西7m程度、検出面で東西6m程度とみられる。残存する周溝底からの残丘高0.3mを測る。周溝・主体部以外には特に地山整形はみられない。検出面より上は包含層がのり、主体部の遺存状況や、周溝の層位所見より、封土による墳丘はなかったか、ごく薄くて早くに失われたとみられる。

周溝 SD-430はSO-130の西から南を画し、東壁にいたる。土坑SK-042に一部切られるが、遺存はよい。弧をなして延び、西に行くほど狭く浅くなる。断面は緩いV字形で、残丘側斜面が比較的急になる。検出面での最大幅1.90m、溝底での最大幅0.94m、残存する深さ0.40m(溝底標高5.40m)を測る。覆土は黒褐色粘質土であり、水の流れた様子はみられない。西端では赤色顔料が土器に入れられた状態で出土した。そのほかに特別な廃棄行為は認められなかった。覆土中から上器小片、底面近くで碧玉の石材が出土した。

碧玉片86は原材の小片、87は加工して縦を残さないものである。

SD-430西端から北側は周溝が続かない。陸橋とみるには広すぎるようであり、隣接する円形周溝墓

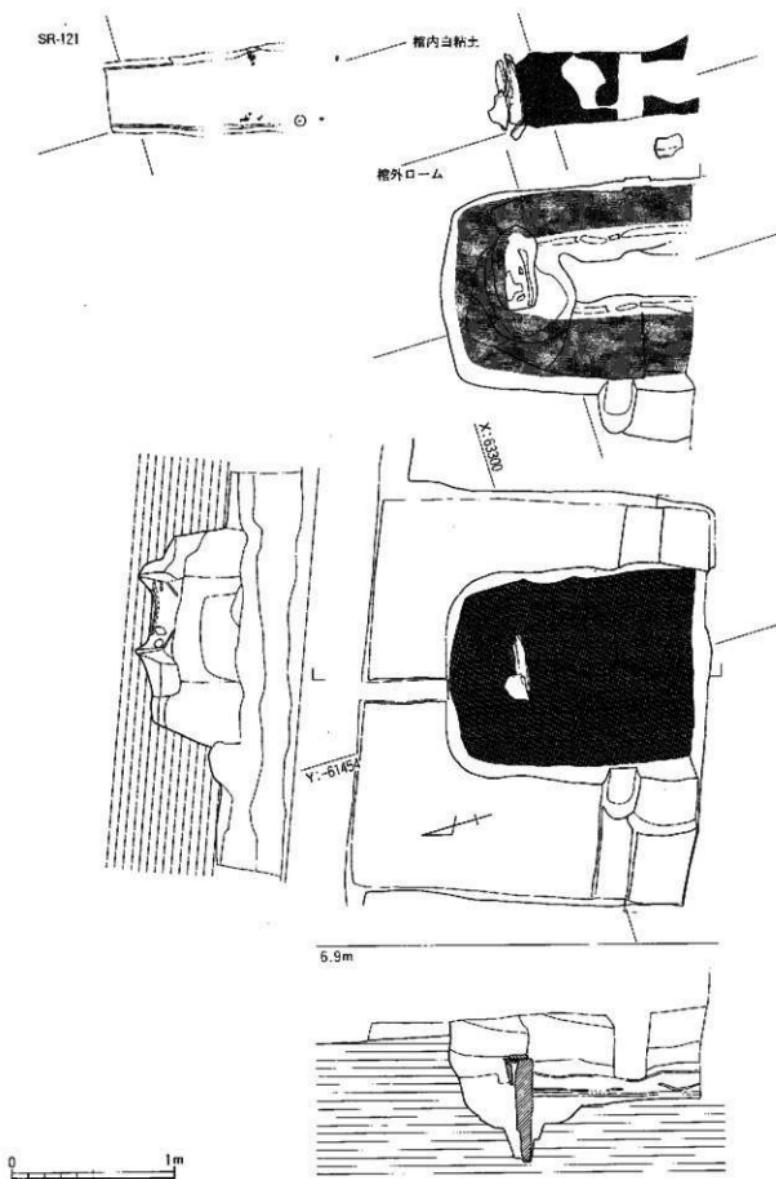


Fig. 16 SR-121 造構実測図 (1/30)

SO-140の周溝SD-440もこの付近で途切れること、また、周溝を伴わない墳墓SQ-003、SQ-004が検出面から浅い位置に乗かれていることからみて、造営当時の地形的な制約から周溝底が包含層中までしかおよんでいないものと考えられる。換言すれば、周溝墓の周溝は地形的な制約に従順であるといえる。円墳SO-150の周溝SD-450との顕著な違いといえる。

主体部 石棺墓SQ-131は、SO-130中央、標高5.5~5.7m地点に所在する。切り合はなく、遺存もよいが、東南隅が調査区外に出る。主軸を北北西（N-17°-W）にとる組合式石棺墓である。墓壇は南側でいくぶん幅の広い隅丸長方形を呈し、八女粘土層におよぶ。長さ2.28m、幅1.30m、残存する深さ1.05m（最下部の標高4.67m）を測る。石棺は墓壇中央に構築されている。側壁・小口の石材は板石で、礎によって隙間を支えている。側壁は東西3枚ずつ、小口は南北1枚ずつの板石を用いている。側壁は東西とも、南側の石材が大きく、北側の石材が小さい。南から順に構築したのだろうか。東側中央の1枚は、いったん抜いて再固定したらしく、内外に白色粘土と黒色粘質土が瓦層をなす部分がある。石材上面を丁寧に加工して平坦面をなす。石材下端を打ち欠いて尖らせたとみられるものもある。壁材上面と内面に赤色顔料を塗布している。側壁石は東側1.71m、西側1.78m、小口石幅は北側0.41m、南側0.37m、石棺内法は長さ1.58m、幅3.6~4.3mを測る。

棺底は灰白色粘土を貼り、赤色顔料を施して棺床とする。床面は南側がいくぶん高い。赤色顔料下の粘土上面に小石材片が多くみられるが、小石材片に赤色顔料は施されていない。棺材の赤色顔料が粘土棺床の上面まで施されていることと考え合わせて、石棺を構築し、粘土棺床をしつらえて棺材が固定された後、石材上面を整え、赤色顔料を棺材、棺床に塗布したことがわかる。この粘土棺床上の赤色顔料面を埋葬面と考える。棺内に副葬品は認められなかったが、東壁沿いの中央南寄りに赤色顔料を盛った状況がみられる。この赤色顔料の頂部は、棺床上に平坦に堆積した粗砂の上に出ている。棺床上の粗砂層は自然堆積というよりも、意図的に敷く、または被せるという行為が行われたとみられる。砂層上には所々に灰白色粘土がみられたが、これらは蓋石の隙間の位置に対応しており、蓋石間の粘土がとけ込んだものとみられる。粗砂層と灰白色粘土の上に茶褐色粘土層が堆積していたことも、灰白色粘土が溶け落ちたために棺内に浸水したことによるとみられる。茶褐色粘土層と蓋石の間は空間が残されていた。

蓋石は板石3枚を基本とし、隙間を小割石でふさぎ、上下に重なる石材間全面に灰白色粘土を施して密閉している。灰白色粘土は石材間全面に塗布しつつも上に載る石材の輪郭からほとんど外にはみ出さず、きれいな面をなすことからみて、はみ出した灰白色粘土を切りとるという行為が行われたとみられる。南側から順に石材を載せており、北側では石材と小口・側壁石材との間に隙間が生じ、これを小割石と灰白色粘土で塞いでいる。蓋石下面全面に赤色顔料を塗布しており、北側の蓋石の下の隙間を塞いだ小割石も、小口・側壁の赤色顔料塗布とは別に、下面に赤色顔料を塗布していることから、蓋として意識されていたことがわかる。棺蓋上の上層では、わずかにロームブロックを含む黒色土を覆土とする。その下では、人為埋没土と思われる黒褐色粘質土、黄褐色粘質土がある。

側壁、蓋石とも南から順に構築してあり、床の傾斜から考えても、南が頭位と考えられる。

#### SO-140 (Fig.20~22 PL.5)

調査区東半部の尾根上、標高6.1~6.8m地点に所在する。周溝SD-440、SD-441、SD-450、SD-472により区画され、竪穴式石室SQ-141を主体部とする。ただし、周溝SD-440は、東半で円形周溝墓SO-110と、西半で円形周溝墓SO-160と、SD-472は円形周溝墓SO-170と、それぞれ共有されている。SD-450は円墳の周溝であり、SO-140構築の際に円墳の周溝を利用したものと思われる。周溝がやや浅く、東側で途切れるが、遺存状態はよい。円形周溝墓であり、残丘は周溝底で南北11.2m、検出面で南北10.3m、

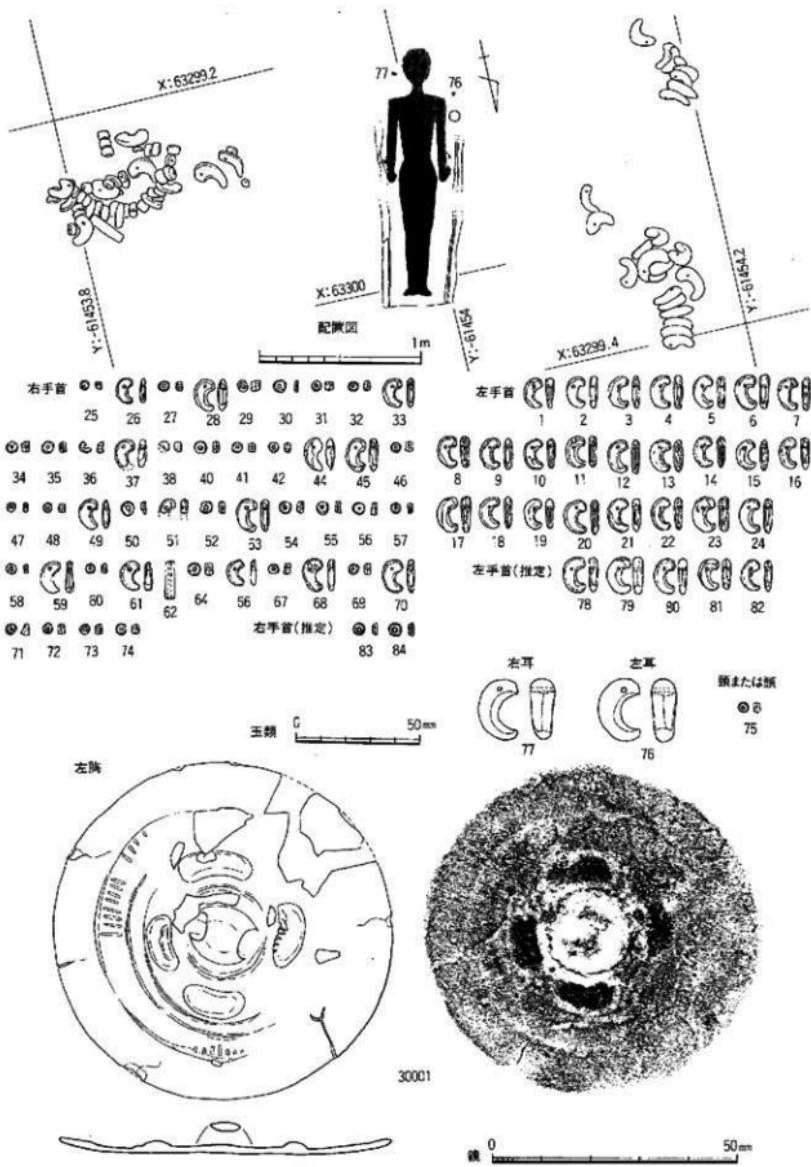


Fig. 17 SR-121 副用品実測図 (1/2, 1/1)

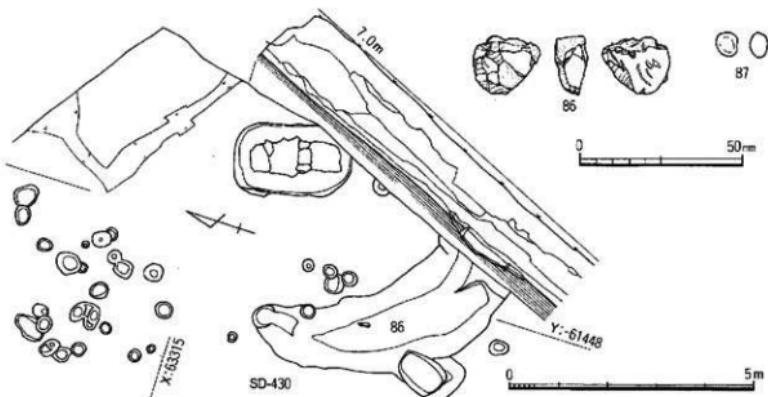


Fig. 18 SO-130 墓構・遺物実測図 (1/100, 2/3)

残存する周溝底からの残丘高1.0mを測る。墳丘については満足な調査ができなかったが、主体部がピットなどを切っているにもかかわらず、主体部を切るピットがみられないこと、遺構検出時、SQ-141の東側でロームと黒色土が混ざった土層が存在して検出に難渋したこと（SQ-141はこの上層を切って造営されていた）などからみて、ある程度の封土が存在した可能性は高い。

周溝 周溝SD-440は、SO-140の南を画する。弥生時代の竪穴住居跡SC-710、土坑SK-044を切り、浅く遺存している。弧をなし延び、断面形はじ字形をなす。溝底は地形に従って上下している。円形周溝墓SO-110の周溝SD-410、円形周溝墓SO-160の周溝SD-460と合流しているが、SD-440がきれいな弧をなし続くのに対し、SD-410、SD-460は合流点まで止まる。これは、SD-410やSD-460の掘削時に既にSD-440が存在していることを示す。検出面での幅0.8m、残存する深さ0.1m（溝底標高6.1～6.7m）を測る。覆土は黒色粘質土であり、水の流れた様子はない。

周溝SD-441は、SO-140の北を両する。調査区の端に位置するため、充分な調査はできなかった。東西方向に外に凸の弧をなし、断面はおそらく緩いV字形をなす。SD-450とSD-472をつないでいる。検出面での幅0.9m以上、残存する深さ0.5m（溝底標高5.8m）を測る。

陸橋 SD-440とSD-441の間は周溝が途切れているが、ここはSO-140の地形的に最も低い地点であり、周溝の深さが包含層中にとどまるものとみられる。従って、SO-140東側に陸橋が存在した可能性はあるが、確定的ではない。

**主体部 (Fig. 21・22)** 竪穴式石室SQ-141は、SO-140の中央、標高6.4～6.6m地点に所在する。弥生時代の掘立柱建物跡SB-910を構成する柱穴SP-9106、SP-9103を切っているが、ほかの遺構に切られておらず、造存状態はよい。主軸を南北（N=7°E）にとる竪穴式石室である。墓室は南側でいくぶん幅の広い隅丸長方形を呈し、箱形に掘り込まれている。検出面で長さ3.6m、幅2.8m、底面で長さ3.1m、幅2.4m、残存する深さ0.9m（底面の標高5.6m）を測る。石室は墓壙の中央やや西寄りに構築されているが、石室主軸は墓壙東壁の方向とは一致している。墓壙自体には、側壁棺材を固定したり位置を定める施設は観察されなかった。側壁・小口は扁平な割石で小口積みしている。石材は南小口と側壁の南寄りで比較的丁寧な加工を行い、また、石室内に向く部分とその付近の上下面に赤色顔料を塗布している。これは、積み上げる以前に、容器にいた赤色顔料に小口部分を浸して着色した

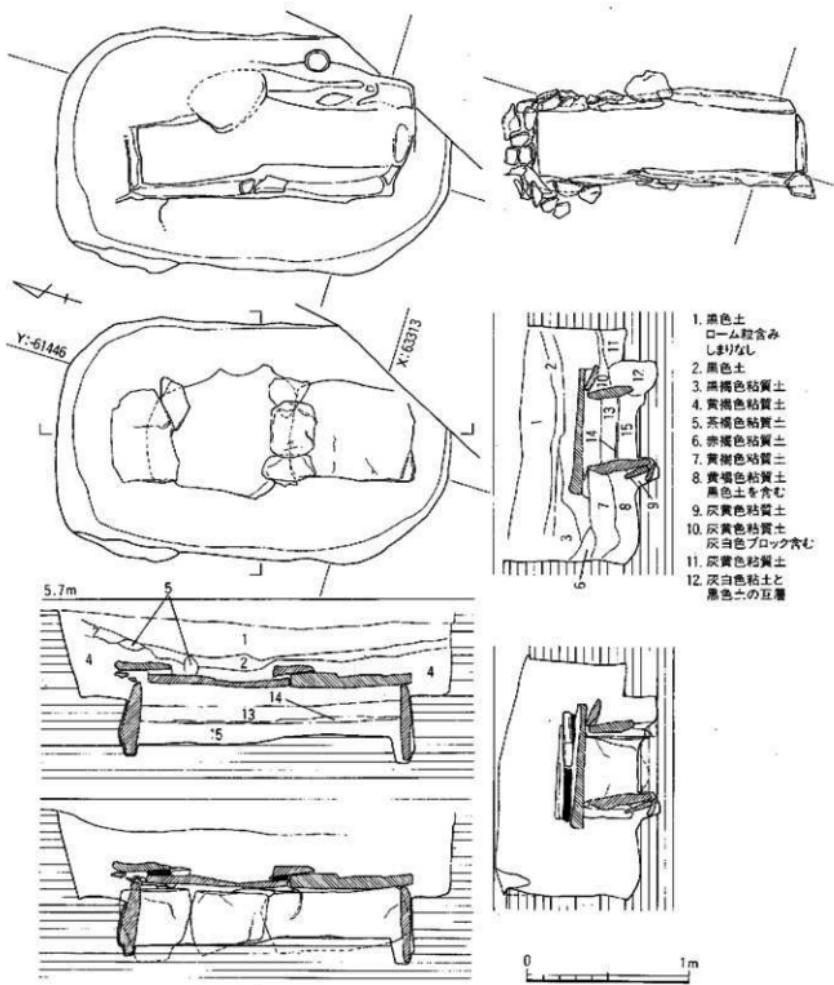


Fig. 19 SQ-131 造構実測図 (1/30)

ものとみられる。石室壁面の構築と控え積みの構築は並行して行われている。最下段をはじめとする、長めの石材を壁に構築した際は、同様に控え積みを行い、次に小割石を壁面に積んだ際は、外側にかなりきれいなロームを貼り、高さを整える。これを1単位として同様の作業を繰り返しつつ、石室壁面を持ち送りし、控え積みもピラミッド状に上にいくほど狭い範囲となる。最上段の壁材を構築した際は、控え積みがピラミッド状になったことによる4周の溝を土で埋め、控え積みを再び壁面近く

まで行い、石室付近を除く控え積みの上にきれいなロームを貼って平坦面を作り出す。これは蓋石を被せるときの作業面とみられる。

石室内法は長さ1.86m、幅0.60m、深さ0.60mを測る。石室底は両小口付近を除く地山上に黄色粘土を薄く貼って床面とし、粘土貼床上にも赤色顔料を施している。この粘土中に、赤色顔料の塗られていない石材小片が多数みられ、石材を整えつつ構築が進められたことがわかる。この石材小片は赤色顔料面上でははっきり見えない。床面の粘土は壁面最下段の構築後に貼られているので、貼床が最下段構築以後・壁体完成以前の時点で行われ、貼床上の赤色顔料塗布が壁体の完成後頃に行われたと考えられる。赤色顔料塗布面上が埋葬面とみられる。床面は南がいくぶん高くなるように傾斜している。木棺の痕跡は認められなかった。西側壁沿いの北寄りで赤色顔料（赤色顔料）が盛った状態でみられたが、石室内に副葬品とみられる遺物は存在しなかった。棺内には粗砂が水平に堆積していたが、貼床上に盛った赤色顔料の頂部が粗砂層の上に突き出していたことや、壁面から脱落した小石材がすべて粗砂層の上面に載っていたことからみて、粗砂層は埋葬行為時に敷いた、または被せたものとみられる。粗砂層と蓋石の間は空間として残されていた。床が高く、壁の整った南側が頭位方向であろう。蓋石は板石1枚であり、北側でやや小さい板石を隙間に差し込んでいた。蓋石下面全体に赤色顔料を塗布している。蓋石を固定するため、壁体最上段の上に灰白色粘土が貼られているが、蓋石の大きさよりは狭い範囲にとどまり、これだけでは蓋石を固定にくかったのか、小割石を灰白色粘土と蓋石の間に差し込んでいる。差し込まれた小石材も下面に赤色顔料が塗られており、蓋として意識されていたことがわかる。

蓋石上の覆土から弥生器が出上した。あるいは周溝SD-440が土坑SK-044を切ったときの遺物が石室を埋めるときに混入したのだろうか。

小結 SO-140からは、時期を確定する遺物は出土しなかったが、堅穴式石室の様相から、ほぼ5世紀前半であるといえる。また、墳墓群内の築造順序も、隣接する墳墓との間ではある程度推定できる。周溝のうち、SD-440がSD-410やSD-460より早くから存在したこと、SD-441がSD-450やSD-472より遅れて掘削されたことは、既に推定した。SD-450、SD-472はSO-140を区画しながらもSO-140間に凸であり、本来それぞれ円墳SO-150、円形周溝墓SO-170を区画するものであった。以上の周溝間の関係は、周溝によって区画される円墳、周溝墓間の関係に置き換えることができる。したがって、円形周溝墓SO-140は円墳SO-150、円形周溝墓SO-170より以後、円形周溝墓SO-110、SO-160より以前に造営されたと考えられる。

#### SO-160 (Fig.23, PL.5)

調査区の頂部付近、標高6.9~7.0m地点に所在する。SD-460、SD-440、SD-461により区画され、土壙墓SR-161を主体部とする。ただし、周溝SD-440は隣接する円形周溝墓SO-140と共有されている。長軸を東西にとる円形周溝墓である。残丘は長径9.1m、短径8.0m、残存する周溝底からの残丘高0.5mを測る。前平により、ローム層の検出面より上はすべて表土の客土層となっており、封土墳丘は遺存せず、本来の封土の有無も推定しがたい。

周溝 周溝SD-460は、SO-160の東から南を画する。北端がSO-140の周溝SD-440と合流する。溝の最下部のみが遺存し、一部は擾乱により失われている。半径約12mの弧をなして延び、断面V字形をなす。北端のSD-440との合流部に近くになるとやや深くなる。南西側で浅くなることから、旧地形がこの方向に高かったことが窺われる。検出面での幅0.2~0.7m、残存する深さ0.6m（溝底標高6.6m）を測る。覆土は黒色粘質土であり、水の流れた様子はない。覆土中より土器小片が出土したが、土器の廃棄行為はみられない。

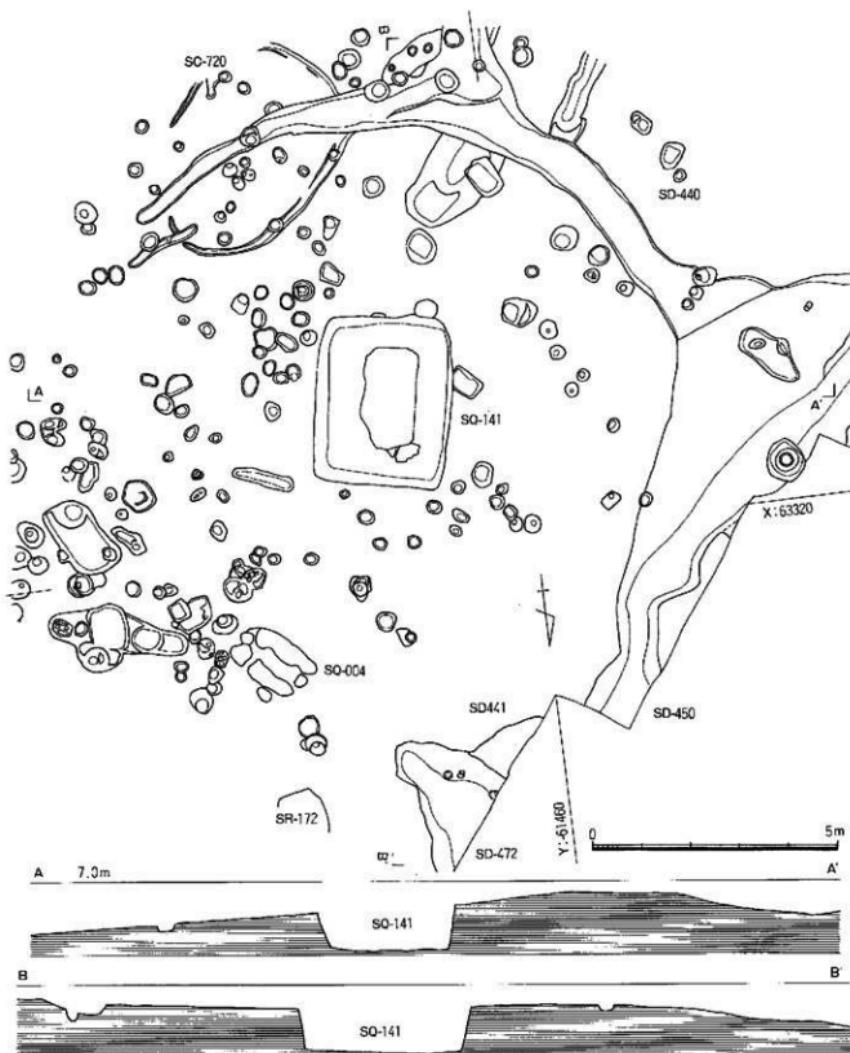


Fig. 20 SO-140 淹構実測図 (1/100)

周溝SD-461は、SO-160の西を画する。大半がSC-750、SC-760の床下に遺存し、北端で円墳周溝SD-450に合流する。地形に従って弧をなして延び、断面V字形ないし台形をなす。検出面での幅0.3~0.6m、残存する深さ0.1m(溝底標高6.9m)を測る。覆土は黒色粘質土であり、水の流れた様子はない。遺物の廃棄行為などはみられない。

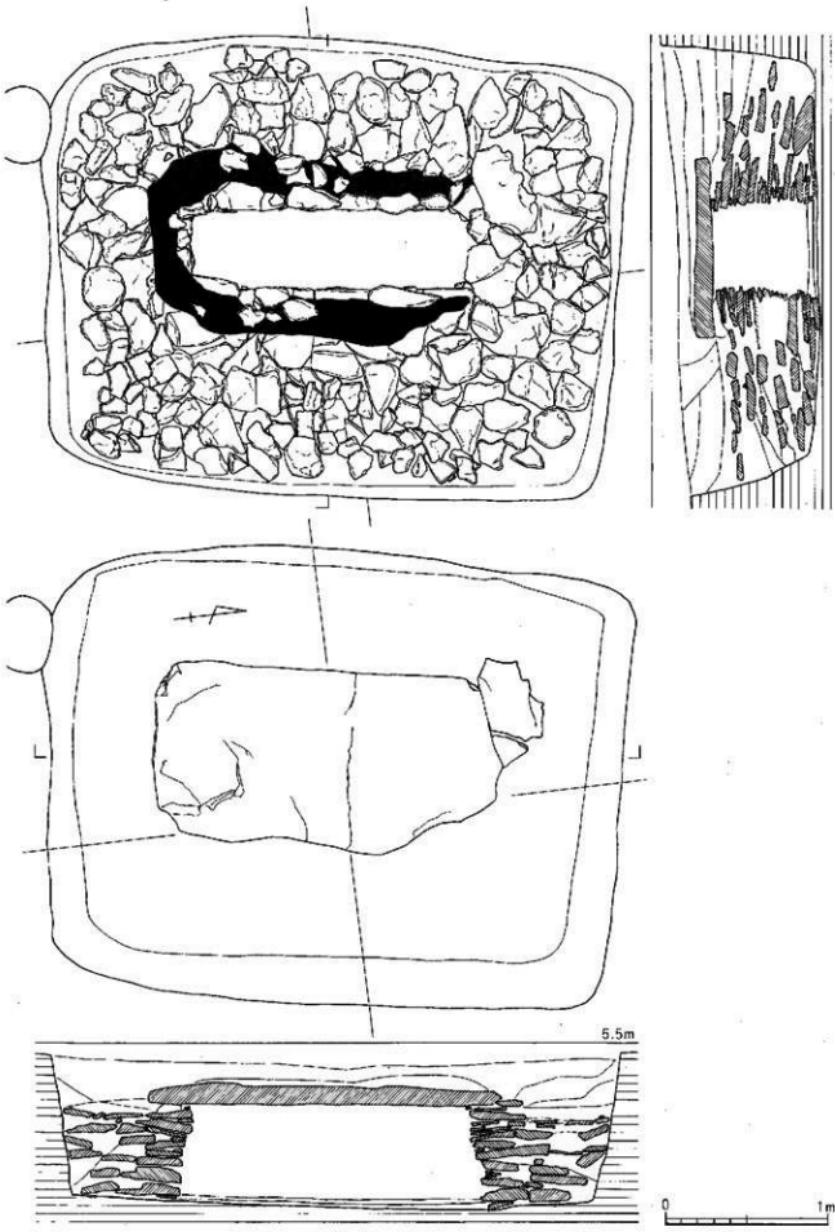


Fig. 21 SQ-141 造構実測図 (1/30)

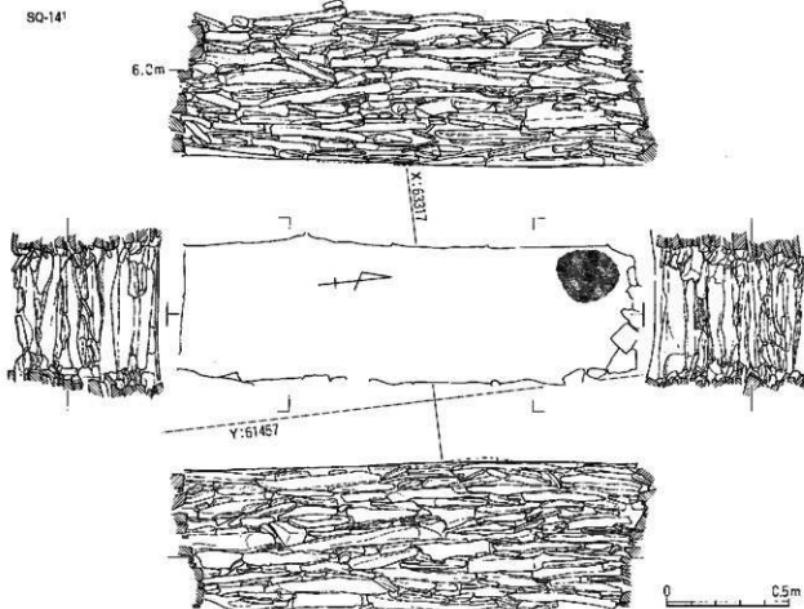


Fig. 22 SQ-141 石室内実測図 (1/20)

周溝SD-440については円形周溝墓SO-140とともに記述した。

陸橋 SO-160の西南、SD-460とSD-461の間は周溝が不明瞭になる。これは削平と擾乱によるものとも思われるが、SD-461南端は立ち上っているので、意図して残した陸橋と考えられる(SF-462)。この方向は主体部SR-161の頭位方向の延長上に当たる。SF-462付近の周溝外に周溝を伴わない墳墓SR-002が営まれていることも示唆的である。

主体部 (Fig.23) 土壇墓SR-161は、SO-160の中央に所在する。切り合はないが、遺存状態も悪くはないが、当初は周溝墓の主体部とは認識しておらず、覆土がロームブロックを主体とし、砂質土をわずかに含むものであったため、擾乱と誤認して掘り上げてしまった。主軸を東西 (N-68°-E) にとる不整形の土壇墓であり、西側で幅が広く浅い。検出面で長さ2.00m、幅0.65m、底面で長さ1.62m、幅0.42m、残存する深さ0.4m (底面の標高6.36-6.53m) を測る。覆土はロームブロックを主体とし、上層では砂質土を多く含んでいたが、既述のように、擾乱と誤認しており、詳しい記録は残していない。木棺の痕跡も捉えてはいない。土壇墓ないし石蓋土壇墓とみられる。内部では土器の小片がわずかに出土したのみで、副葬品はみられなかった。西が頭位方向であろう。

小結 SO-160に伴う確実な出土遺物はみられなかった。しかし、古墳群の構成や周溝の様相から対的な築造時期を推察することはできよう。SO-160は円墳周溝SD-450の一部を利用しているが、規模や占地から考えて、SD-450がSO-160より早くから存在したはずである。また、SD-460は、SD-440との合流点に近くになるとやや広く深くなるが、SD-440にはそのような変化は認められず、SD-460掘削時に

既にSD-440が存在し、SD-440を意識していることが窺われる。SD-440がSO-160側に凸となり、SD-440に接するSO-160残丘の平面形が整わないことも、SO-160構築時に既存の周溝SD-440を利用したことを見ている。従って、円形周溝墓SO-160は、円墳SO-150や円形周溝墓SO-140よりも遅れて構築されたといえよう。また、陸橋SF-462付近の土壙墓SR-002が円形周溝墓SO-160を意識して營まれたものならば、SO-160よりも以後となろう。

#### SO-170 (Fig.24~26, PL.7・8)

調査区東半部北端、標高6.0~6.5m地点に所在する。SD-470, SD-471, SD-472により区画され、石棺墓SQ-171と土壙墓SR-172を主体部とする。ただし、周溝SD-472の東南端は隣接する円形周溝墓SO-140と共に共有されている。周溝が途切れるほかは、遺存状態は悪くない。円形周溝墓である。残丘は南北10.5m程度、東西14m程度、残存する周溝底からの残丘高0.8mを測る。そのほかの地山整形は確認されない。いくぶん削平もあり、封土墳丘は遺存していなかった。

周溝 周溝SD-470はSO-170の東南を画するらしい。切り合いはないが、主要部分は調査区外に出ると思われる。断面V字状をなす。検出面での幅0.6m、残存する深さ0.1m（溝底標高5.7m）を測る。遺物の廃棄行為はみられなかった。

周溝SD-471はSO-170の南を画する。東西方向に延び、断面逆台形をなす。溝底は地形に従って上下している。検出面での幅0.6~1.0m、残存する深さ0.1m（溝底標高6.0m）を測る。遺物の廃棄行為はみられなかった。

周溝SD-472はSO-170の西を画する。SD-441との関係は明確でない。断面V字状をなす。検出面での幅2.5m、残存する深さ0.7m（溝底標高5.7m）を測る。覆土は黒色粘質土であり、水の流れた様子はない。廃棄したと思われる土器3点が南側斜面寄りに出土した。

高杯20019は赤色顔料を入れて溝に廃棄されていた。厚手のため、見た目より重い。焼成はやや甘く、灰褐色である。脚は接合面で折損しており、脚部破片は見つからなかった。脚付壺20020は、高杯20019に隣接して廃棄されていた。焼成は甘く、内外面は暗灰色、断口は灰白色である。小型器台のごとき原形を作り、これに胴部・口縁部を積み上げて成形している。器台形原形と胴部との境界には外而に素地を補っていた。脚部は接合面で折損していたが、脚部破片は見つからなかった。高杯20019も脚付壺20020も、廃棄時に脚が折損していた可能性が高い。廃棄者は、脚が折損していたことを承知していたか、あるいは何らかの意図で脚を折って土器を廃棄したのであろう。壺20021は肩部以上が著しく破損し、復元できなかった。胴部に穿孔がみられる。

周溝はとぎれとぎれであるが、その意義は不明である。

#### 主体部 石棺墓SQ-171と土壙墓SR-172が残丘上に認識された。

第1主体部SQ-171 (Fig.25・26) は、SO-170中央と思われる標高6.0~6.3m地点に所在する。若干の擾乱を受けているが遺存は良好である。主軸を南北（S-10°-E）にとる組合式石棺墓である。墓壙は南側でいくぶん幅の広い隅丸長方形を呈し、検出面で長さ2.5m、幅1.7m、底面で長さ2.2m、幅1.35m、残存する深さ1.25m（最も低い位置で標高5.05m）を測る。石棺は墓壙中央に構築されている。棺材は墓壙底の溝に据えられており、側壁は東側5枚、西側4枚、小口は北側2枚、南側1枚を用いており、2重になっている部分がある。石材は内面と上面に赤色顔料を塗布している。側壁は東側2.17m、西側1.89m、小口石幅は北側0.36m、南側0.39m、石棺内法は長さ1.60m、幅0.42mを測る。棺底は地山に赤褐色土を貼って棺床とし、南側が高くなるようにいくぶん傾斜している。棺内下層には粗砂が薄く堆積しており、蓋石の隙間に差し入れた石材が砂層上面に落ちていることから、埋葬時に被葬者の上に被覆したものと思われる。

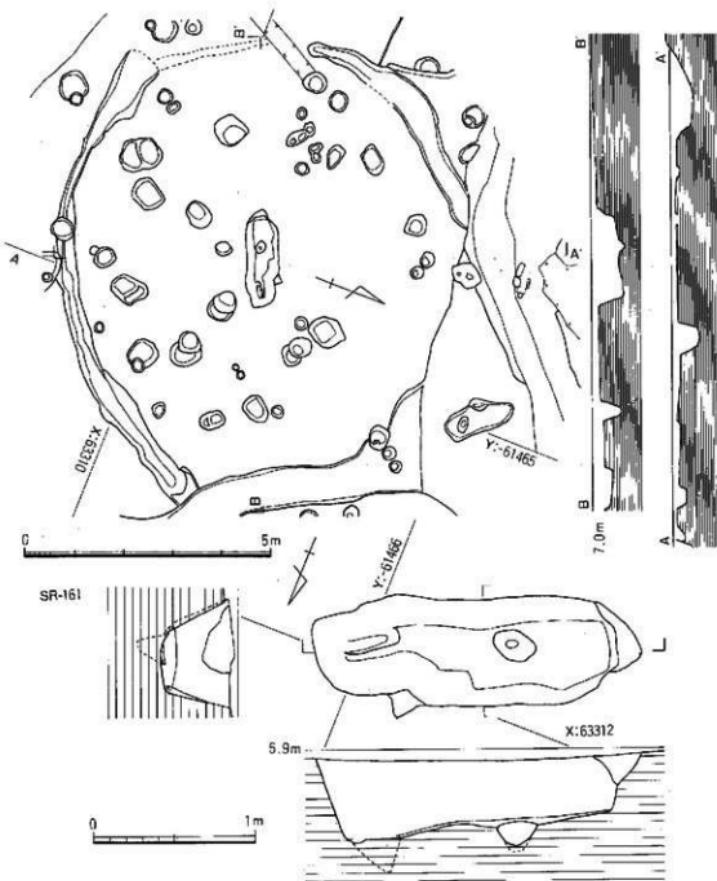


Fig. 23 SO-160 遺構実測図 (1/100, 1/30)

棺内では小玉1点が出土した。粗砂層の上には浸水による泥がたまっており、泥土と蓋石の間には空隙が残っていた。

蓋石は板石1枚を基本とし、中央に割石をいくつか配置する。主たる板石は3つに割れていたが、おそらく設置直後に破損したため、隙間を埋めるために割石を上に載せたのであろう。また、石棺北端では棺内を主たる板石で覆いきれず、隙間を塞ぐために小型の割石を差し込んでいるが、誤って割石1点が棺内に落ち込んでいる。蓋の日地に灰白色粘土は用いていないが、西側壁の2重になった石材の間に粘土を補った部分はある。蓋石下面全体に赤色顔料を塗布している。蓋石上の覆土は赤色土ブロックと黒色土ブロックを中心とする土が主体となる。蓋石上の覆土の内、南寄りでは管玉、小玉、碧玉片が出土し、棺外副葬品と思われる。棺外の工の出土位置や、床面の傾斜から、南が頭位方向と

思われる。

管玉には石材に3種があり、89, 90は練泥片岩で軟質、91~96は滑石だが比較的硬質で灰黒色、97~99は灰緑色の滑石で、木棺墓SR-121出土玉類と似ている。小玉は灰黒色の滑石製で、形態にバリエーションがみられる。

第2主体部SR-172 (Fig.26) は、調査区東半部の北寄り、標高6.3~6.4m地点に所在する。円形周溝墓SO-170の残丘上である上、第1主体部SQ-171と主軸が並行しているので、SO-170の第2主体部であるとみた。切り合はなく、遺存状態もよい。主軸を南北 (N~10°W) にとる隅丸長方形の上擴墓である。SQ-171とはほぼ平行である。長さ2.0m、幅0.93m、残存する深さ0.4m (床面の標高6.00m) を測る。北側で幅が広いが、墳底は南が高く、北が低い。また、墳底北端は東西方向の溝状を呈するが、性格は不明である。壁面は墳底よりはやや傾斜しているが、半ばから検出面まではほぼ直立する。断面上層上でも、平面的にも、木棺や蓋の痕跡は確認できなかった。副葬品の位置からみても、木棺は存在しなかったと考えられる。北小口西寄りの墳底上で、赤色顔料入りの壺20022に二重口縁壺形土器23の破片をかぶせた状態で出土し、副葬品と思われる。土圧によって下の赤色顔料内蔵壺20022が上の壺形土器破片20023を突き破った状態で検出されており、半截された土器20023を意図的にかぶせたことは確実である。墳底の傾斜からみて、南が頭位方向であろう。

壺20022は胴部内面中位に赤色顔料の水面が明確に残っている。壺20023は撫で肩が特徴である。布留式新段階の古い部分、5世紀初頭頃に位置づけられる。

小結 SO-170の所属時期は、第2主体部SR-172の副葬土器や周溝SD-472の出土土器から、布留式新段階の古い部分、4世紀末ないし5世紀初めに位置づけられる。墳墓群の造営順序のうち、隣接する墳墓との関係はある程度推定できる。まず、円墳SO-150は占地などから最も古ないと既に推定したが、遺物の時期差はあまりない。円形周溝墓SO-140より以前に造営されたことも既に推定した。SO-170, SO-140双方の周溝外に位置する周溝を伴わない墳墓SQ-003は、さらに遅れる時期のものであろう。問題は周溝を伴わない墳墓SQ-004との関係であるが、周溝SD-471, SD-472が本来つながったものであったとすると、SQ-004上を通ることとなる。SQ-004は石材がすべて抜き取られた石棺墓痕跡とみられるので、周溝掘削時に破壊されたと考えると、SO-170よりも古く位置づけられる。

#### (4) 周溝を伴わない墳墓 (S R・S Q)

周溝を伴わない墳墓もいくつか検出された。円墳SO-150南側にSR-001, SR-002の2基、調査区東半拡張区にSQ-003, SQ-004の2基が、それぞれ検出され、構造も木棺墓、上擴墓、木蓋石棺墓、石棺墓など多様である。円墳・周溝墓に付随すると考えられるが、SR-001については周溝墓の主体部である可能性も残る。

##### SR-001 (Fig.27, PL.8)

調査区西半部の南端近く、標高7.4m地点に所在する。円墳SO-150や円形周溝墓SO-160から適度な距離をおいて位置しており、周溝が削平により失われた周溝墓の主体部であった可能性も考えられる。削平され、北側に浅い擾乱も入っているが、2段掘りの墓壙を持つ木棺墓である。墓壙は長方形を呈し、検出面で長さ2.41m、最大幅1.21m、底面で長さ2.38m、最大幅1.17m、残存する深さ0.17m (底面の標高7.2~7.4m) を測る。墓壙の中央やや西寄りに位置する棺壙は細長い隅丸長方形を呈し、上面で長さ2.05m、最大幅0.67m、底面で長さ1.92m、最大幅0.50m、深さ0.34m (底面の標高7.0~7.1m) を測り、南西側で幅が広い。墓壙・棺壙とも底面がやや傾斜し、南北側 (頭位) が高い。棺壙には木棺を固定するための施設などはなく、平面的である。埋葬部の壁面は直立に近く、最大幅部分を除いて

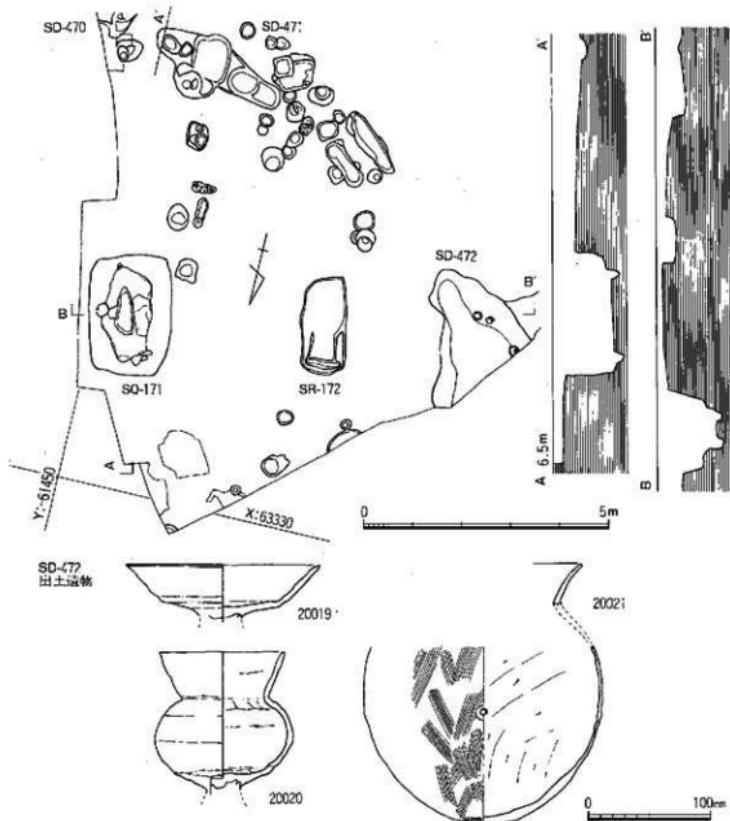


Fig. 24 SO-170 造構・遺物実測図 (1/100, 1/4)

壁面の崩落はみられない。埋葬部の主軸を南西 (S-44°W) にとる。

覆土上を観察すると、埋葬部壁面と最下部に灰茶色粘質土（5層・10層）がみられ、木棺の底板・側板と考えられる。埋葬部の最大幅部分でのみ壁面が崩落した状況は、最大幅部分では側板と壁面の間に隙間が残り、ほかの部分では隙間がほとんどなかったこと、側板の腐朽以前に棺内が埋没したことなどを示している。上段両側の4層と埋葬部の9層（いずれもロームを主体とする暗黄褐色粘質土）、上段両側の3層と棺内の7層（いずれもローム粒子を含まない黒褐色粘質土）が対応しており、棺内の7層・9層は木棺の木蓋に載っていたものが木蓋の腐朽または破損によって棺内に落ち込んだと見做すことができる。6層は、木蓋上の覆土が埋没した後、両側の3層・4層がブロック状となって混合し、入り込んだものとみられる。すなわち、側板に木蓋を載せ、木蓋上にまず4=9層、次いで3=7層、さらに2層が被覆されたとみられる。覆土中から土器片が出土したが、副葬品はみられなかった。南西寄りの底面で

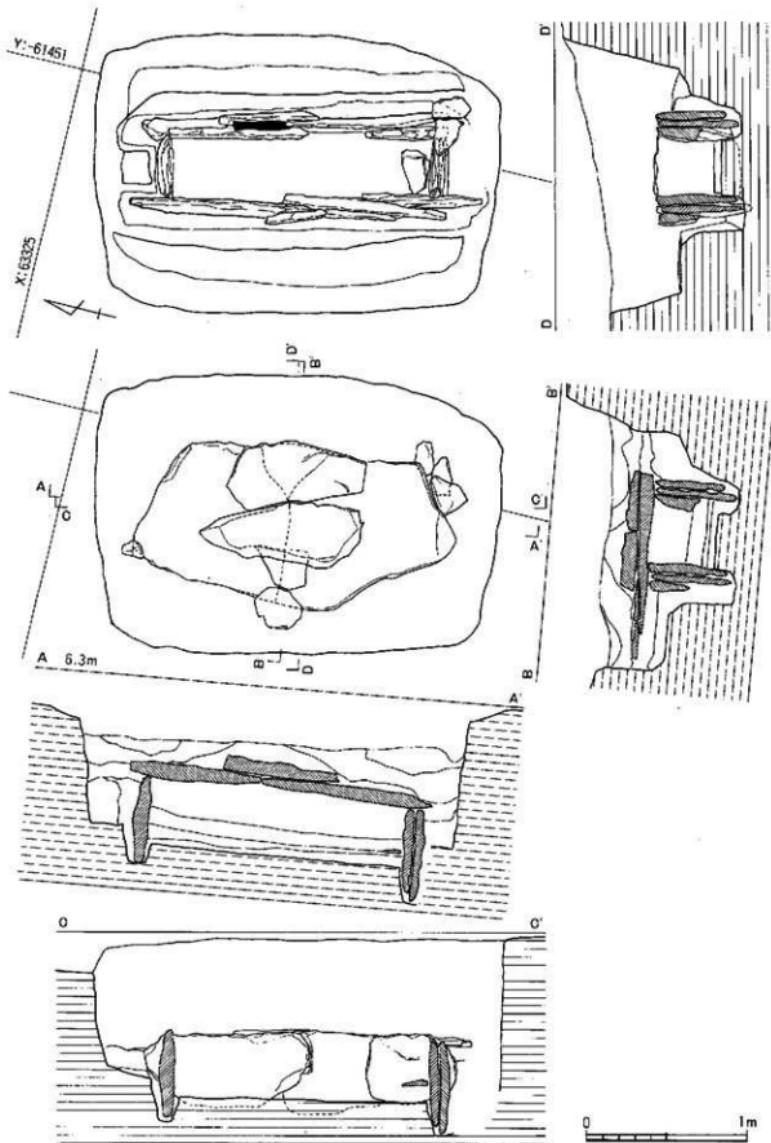


Fig. 25 SQ-171 進情実測図 (1/30)

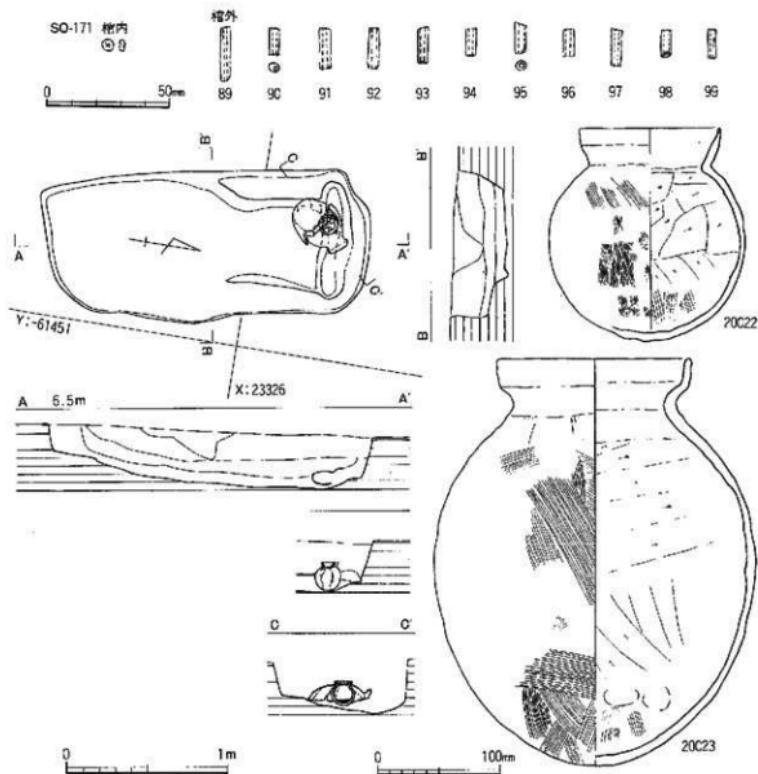


Fig. 26 SQ-171, SR-172 造構・造物実測図 (1/30, 1/4, 1/2)

赤色顔料が出土した。南西側で幅が広いことからも、南西が頭位方向であろう。

円形周溝墓と同時期の、周溝を伴わない墳墓と考えられる。

#### SR-002 (Fig. 27)

調査区西半部の東端近く、台地稜線付近の標高7.0~7.1m地点に所在する。すぐ東側に円形周溝墓周溝SD-461と陸横SF-462があり、SR-002は円形周溝墓SO-160のすぐ外に存在することになる。SR-002上にSC-750の貼床が被っている。遺存包帯は良好である。主軸を南北 (N - S - W) にとる隅丸長方形の上擴墓である。検出面で長さ1.9m、幅8.5m、底面で長さ1.58m、幅0.64m、残存する深さ0.65m(最も低い位置の標高6.35m)を測る。北側で幅が広い。溝底は南側がやや深く掘り込まれている。壁はほぼ直立し、崩落はみられない。溝底には副葬品はみられなかった。木棺の痕跡はみられない。覆土中に土器と赤色顔料が集中した地点がある。墳墓に関わる祭祀の可能性がある。北が頭位方向であろう。

小型丸底壺20024は全面に赤色顔料が塗布されている。

### SQ-003 (Fig.27)

調査区の東半部北寄り、標高6.0m地点に所在する。円形周溝墓SO-140, SO-170の周溝外に当たる。弥生時代のピットSP-0631, SP-0632を切る。遺存はよかつたが、調査の手順を誤り、充分な調査、記録ができなかった。主軸を南東-北西 (S-25°-E) にとる木蓋石棺墓である。墓壙は長方形を呈し、検出面で長さ1.7m、幅0.9m、底面で長さ1.45m、幅0.80m、残存する深さ0.43m（最も低い位置の標高5.65m）を測る。石棺は墓壙中央に構築されている。側壁・小口は割石を立て並べて内外を円礫で支え、黄白色粘土で固めている。側壁石は東側1.2m、小口石幅は北側6.6m、石棺内法は壁長0.88m、小口幅0.5mを測る。棺底は地山を利用してそのまま棺床とする。棺床は北が高く南が低い。また、南端は深く掘りこまれている。棺内の堆積土は黒色土であった。棺内に副葬品はみられず、覆土中からも遺物はほとんどみられなかった。北が頭位方向であろう。棺内に割石が内方に傾斜して浮いた位置に出土した。木蓋上に積んだ割石が木蓋の腐朽によって棺内に落ち込んだものとみられる。すなわち、壁体上には木蓋をかぶせたものと思われる。

改めて構造をまとめる。床面は地山を利用している。壁は割石を立て並べて内外を円礫で支え、黄白色粘土で固めている。木蓋をかぶせ、さらに割石を木蓋の上に載せる。

SQ-003自体に時期を示す証拠は乏しく、このような木蓋土壙墓が古墳時代の墳墓として存在したという実例も検索しえなかつたが、弥生時代の遺構を切ることや、墳墓群の一員とみられることより、ほかの墳墓と同様、SQ-003も4世紀末から5世紀前半にかけてのものと推定される。

### SQ-004 (Fig.27)

調査区東半部の北寄り、標高6.3-6.4m地点に所在する。円形周溝墓SO-140, SO-170の周溝が存在すべき位置である。主軸を北西-南東 (N-43°-W) にとる組合式石棺墓の抜き取り跡と思われる。墓壙はほとんど削平され、棺材設置溝のみが残されている。棺材設置溝の範囲は北側が幅の広い長方形を呈し、長さ1.7m、幅1.0m、残存する深さ0.27m（底面の標高6.08m）を測る。棺材設置溝の間に地山が高く残るが、上面が検出面と一致するので、本来の棺底とは異なるかも知れず、棺床の設営は不詳である。北が頭位方向であろう。棺材設置溝の覆土は黒色土であり、ロームブロックなどは含まれず、自然堆積とみられる。棺材設置溝内で石材が出土している。SQ-141出土の石材に似ている。

SQ-004自体に時期を示す証拠は乏しいが、墳墓群の一員とみられることより、ほかの墳墓と同様、SQ-004も4世紀末から5世紀前半にかけてのものと推定される。

## 8. 古墳時代の集落と出土遺物

古墳時代の集落遺構は、いずれも古墳時代後期、6世紀に位置づけられる。

### (1) 穴住居跡 (S C)

古墳時代の穴住居跡は、調査区西半部を中心に検出された。いずれも床面近くまで削平されていた。SC-750 (Fig., PL.8)

調査区東半部と西半部の境界上、標高7.0-7.3m地点に所在する。周溝墓周溝SD-461、土塚墓SR-002を切るが、住居跡東半は切り下げられた調査区東半部にかかり、床面まで削平がおよんでいる。西壁を (N-4°-E 方向) に向けた方形または長方形の穴住居跡である。残存する深さ0.2m（床面の標高7.1m）を測る。主柱穴としてSP-7501が認識される。位置関係から4本柱とみられる。貼床はあるが、ベッド状構造は認識できない。北壁に灰白色粘土で作られたカマドSX-751がとりついている。先ほどの主柱穴の位置からみると、SX-751は北壁中央から東にずれることになるが、かといってSX-751

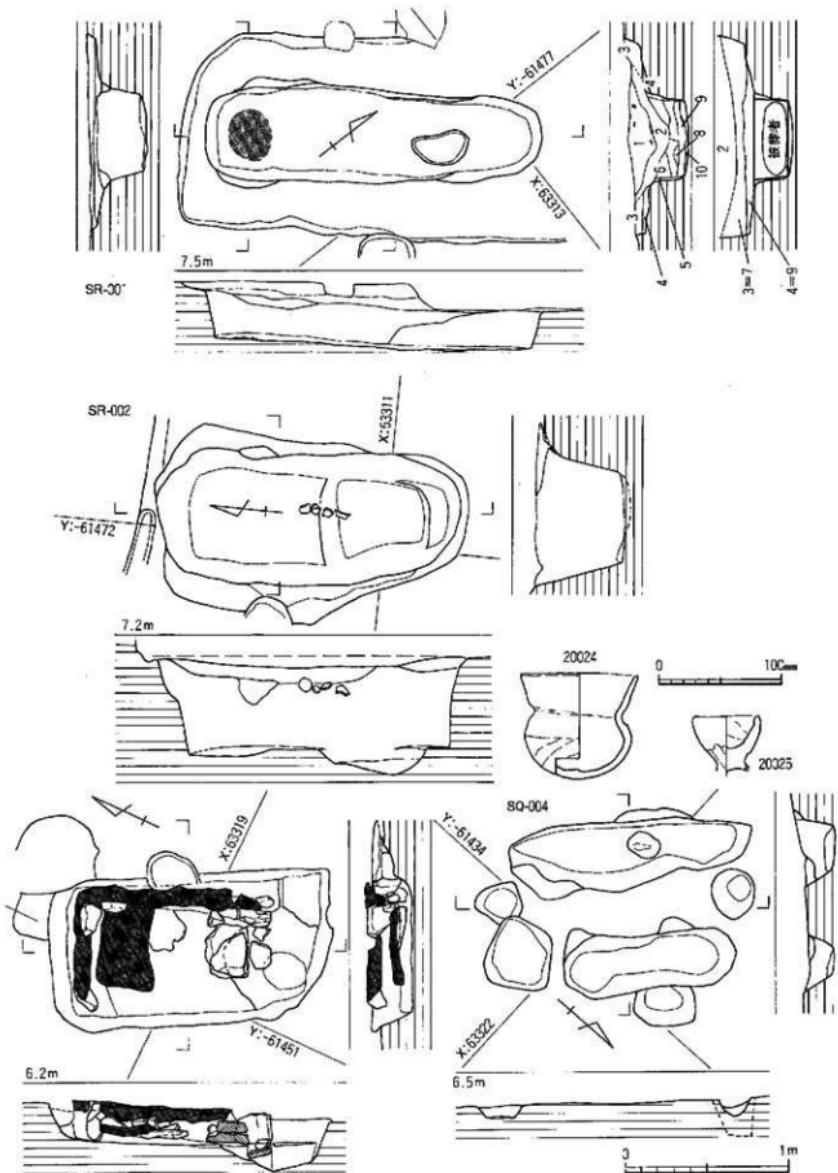


Fig. 27 SR-001, 002, SQ-003, 004 濾構・遺物実測図 (1/30, 1/4)

の位置をSC-750北壁中央と仮定すると、住居が大きくなりすぎ、ふさわしい主柱穴も存在しないことになる。床下にSR-002が存在するために、何かの不都合から北壁中央を避けたと考えられる。西壁沿いと北壁沿いに壁溝があげぐる。覆土は黒褐色粘質土である。

床面から出土した甕20026は、かろうじてタタキメが観察されるものの、被熱しており、摩滅が顕著である。甕20027は完形であるが、SP-1619より出土したもので、SC-750に伴う確証はない。

#### SC-760 (Fig.28)

調査区東半部と西半部の境界上、標高7.0m地点に所在する。円墳周溝SD-450を切り、SC-750に切られる。SC-760とSD-450が切り合うことは、早くから認識していたが、先後関係はSC-760の床面が検出されるまで不明確であったため、壁がごくわずかしか確認できなかった。北壁をN-62°-W方向に向かた堅穴住居跡である。残存する深さ0.2m(床面の標高7.0m)を測る。主柱穴・壁溝・カマドなどは認識できない。貼床はごく薄いが、全面で確認された。

床面から土器器、須恵器が多量に出土した。図示したのは比較的遺存のよい遺物である。甕20030は被熱し、摩滅が著しい。

#### SC-770 (Fig.29)

調査区の西端近く、標高7.5m地点に所在し、全体の4分の1程度が調査区内に属する。SC-780を切る。削平と擾乱が入っており、さらに、機械掘削中に一部の覆土を床面近くまですき取ってしまったが、遺存状態は悪くない。南東壁をN-55°-E方向に向けた長方形または方形の堅穴住居跡である。南東壁の壁長5.3m、北東壁の壁長2.2m以上、残存する深さ0.1m(床面の標高7.36m)を測る。主柱穴としてSP-7701、SP-7702が認識され、その位置からみて、4本柱と推定される。南西壁沿いの幅0.9mにロームを貼って、一段高いベッド状造構とするようである。ベッドの高さは0.1mである。北東壁際と南端付近にロームの貼床が確認できるが、いずれも薄いものである。南端の貼り床とベッド状造構は、埋められたSC-780の主柱穴SP-7803を覆っている。調査範囲内にはがやカマドはみられなかったが、調査区西壁土層をみると、西南壁寄りの床面近くに灰白色粘土がみられ、カマドに関わるものと考えられる。上述のように、覆土を重機で一部すき取るという失敗により、灰白色粘土の平面的な広がりを知ることはできなかった。壁溝は南東壁の一端で切れ、これより北側をSD-771、南側をSD-772とした。

須恵器などが出土しているが、図示に耐える遺物はない。

#### SC-780 (Fig.29)

調査区の西端近く、標高7.5m地点に所在する。SC-770に切られ、床面近くまで削平されている。南壁をN-83°-Wに向けた方形の堅穴住居跡である。東西4.1m、南北3.2m以上(おそらく4m程度)、残存する深さ0.1m(床面の標高7.45m)を測る。主柱穴としてSP-7801、SP-7802、SP-7803が認識され、位置関係からみて4本柱であろう。全周してはいないが、壁溝がめぐっている。全体に貼床はあるが、ベッド状造構は確認できなかった。炉やカマドは確認されなかったが、尖われた北壁または西壁にカマドが設置されていた可能性は残る。

床面から須恵器片が出土した。蓋20031は、重ね焼きにより別個体の蓋の口縁が熔着している。

## (2) 粘土貯蔵穴 (S U)

#### SU-790 (Fig.30)

調査区西半部の中央近く、標高7.5m地点に所在する。円墳SO-150の周溝SD-450を切る。遺存はよいが、調査の過程で北端部近くを、それと気づかず破壊してしまった。長軸を南北方向(N-9°-W)に向けた梢円形の堅穴である。南北4.0m、東西2.4m、残存する深さ0.5m(床面の最も低い位置で標

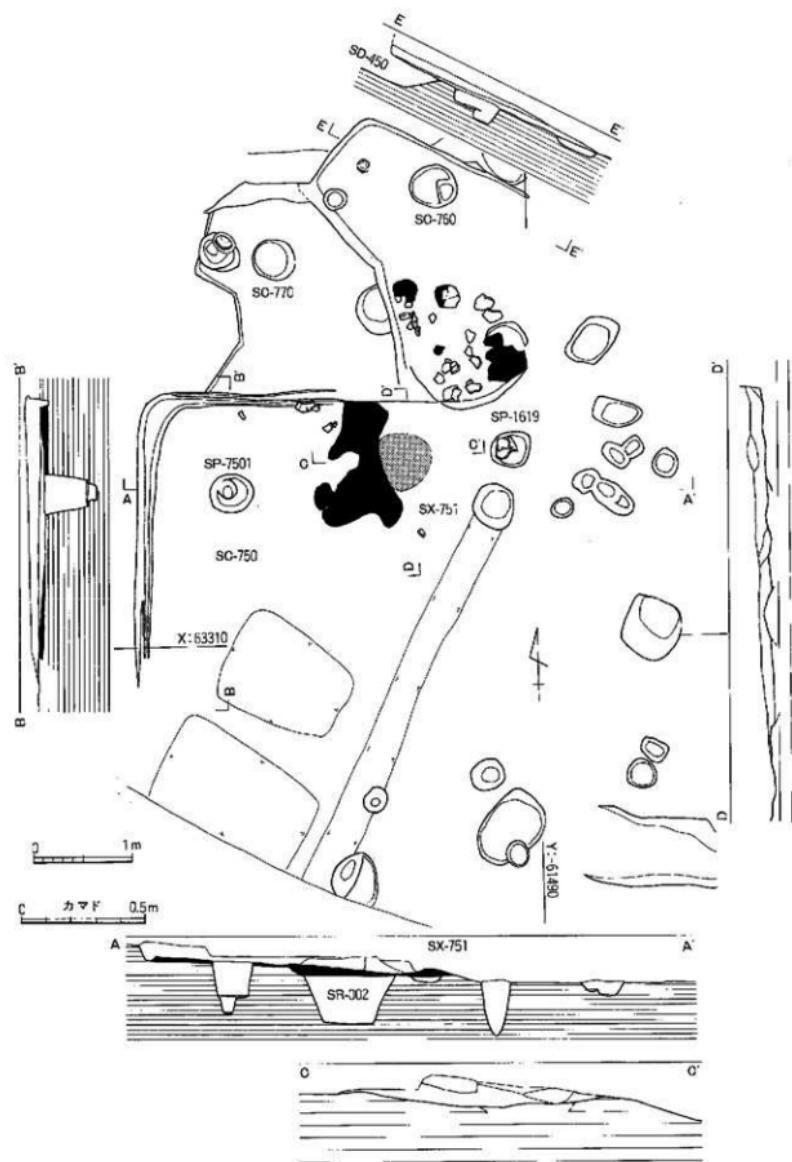


Fig. 28 SC-750.760 掘削実測図 (1/50)

高5.92m)を測る。壁と床の区別がはっきりせず、號溝、柱穴や被熱面も存在しない。底面はロームブロックなどが多くみられることにより認識できるが、竪穴住居の貼床とは様相が異なる。北壁沿いと南壁沿いに八女粘土が集積している。同時期の竪穴住居であるSC-750に八女粘土で構築されたカマドが存在し、SC-770でも八女粘土のカマドの存在が推定されることから、SU-790はカマドの構築や修理の際の八女粘土の使用に備えた粘土貯蔵穴と判断した。覆土中の浮いた位置から須恵器片が多量に出土したが、これらはSU-790に伴うというよりも、機能を失ったSU-790に廃棄されたものと考えられる。

覆土中から、多量の土器、石器、礫が出土した。石劍10008は造構に伴うものではなく、弥生時代のものの混入である。全体に摩滅が著しい。壺20037は内面に緑褐色の自然釉が付着している。外面は8箇具による波状紋を施す。図示したほかにも、須恵器の壺・壺の胴部片が多量に出土した。

### (3) 溝状造構 (S D)

#### SD-021 (Fig.30)

調査区東半部の斜面上、標高5.9~6.5m地点に所在する。南端は調査区東半南壁外にあり、調査区内には9.5m分が認められる。一部の柱穴に切られ、円形周溝堀SO-120の周溝SD-421を切る。北北東~南北西方向(N-31°-E)に延び、やや湾曲するが直線的な平面形で、断面逆台形をなす。最大幅1.30m、残存する深さ0.21m(溝底標高5.9~6.3m)を測る。覆土はロームブロックを含む黒褐色粘質土であり、下層ではロームブロックを覆土とする。水の流れた様子はない。上層より土器片をわずかに出土した。廃棄行為などは認められない。

出土遺物はほとんどなく、検出面で須恵器壺杯の破片(6世紀頃)が出土したのみであった。

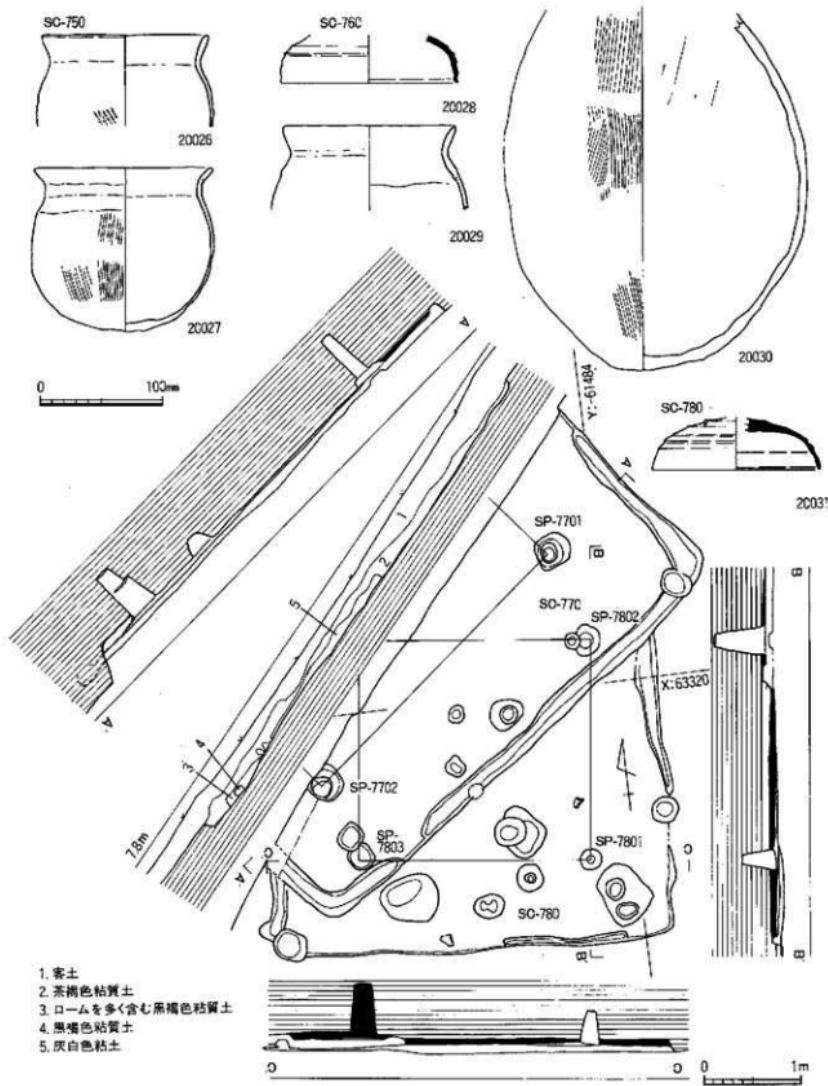


Fig. 28 SC-750, 760, 770, 780 造構・遺物実測図 (1/50, 1/4)

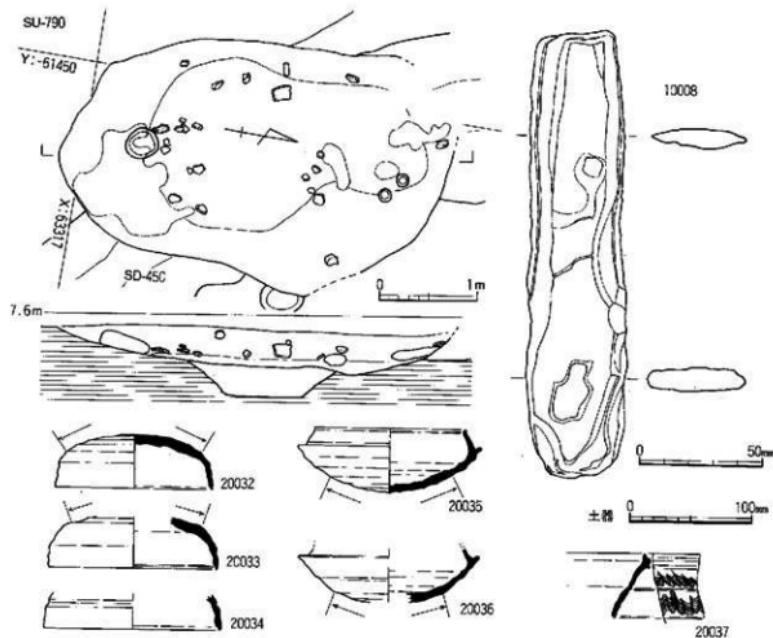


Fig. 30 SU-790, SD-021 造構・遺物実測図 (1/50, 1/60, 1/4, 1/2)

### III ま と め

これまで、有田遺跡群の中でも南庄地区は、有田地区、小田都地区に比べて考古学的調査が少なかった。これは開発の頻度の違いによるものであり、埋もれた遺跡の重要性に出来するわけではない。むしろ、古墳時代の墳墓群の存在が想定されるなどしていた。しかし、調査の事例が少ない上、諸般の事情により報告書未刊行の調査地点もあり、南庄地区の実相はつかみきれていた。

今回実施された第178次調査は、調査面積において南庄地区で最大であり、旧石器時代から古墳時代までの南庄地区について、新たな知見を得ることができた。ここでは、古墳時代の墳墓群について所見を記し、まとめに代えることとする。

今回の調査範囲内で、古墳時代の墳墓は14基（主体部数では15基）確認され、その内訳は円墳1基、円形周溝墓6基（主体部は都合7基）、周溝を伴わない墳墓4基、周溝内埋葬3基であった。これらに加え、第89次調査で確認された周溝状遺構、1973年に隣接地で発見された石棺から、南庄地区北半の西尾根上に古墳・周溝墓群が展開していたことは確実となった。「南庄地区に墳墓地域がある」という想定（山崎1993：3）を裏づけたことになる。また、747m<sup>2</sup>という調査面積の中で、墳墓と墳墓の間の関係について、若干の情報も得ることができた。

以下、①墳墓の築造順序、②墳墓間の格差、③赤色顔料について、順を追って述べよう。

#### ①墳墓の築造順序

墳墓群のうち周溝を作うものは、互いに周溝を共有する場合がある。周溝の覆土の切り合い関係を十分に認識することはできなかったが、円弧をなしてめぐる周溝を2基の墳墓が共有する場合、後から構築された周溝墓の残丘は円形にならず、不整形になるので、これによって隣接墳墓の先後を知ることができる。

円墳SO-150は、尾根の頂部に築造され、今回の調査では最大規模である。このことから、調査区の中では最古の墳墓である可能性が高い。周溝SD-450は、周溝内壺棺墓ST-452による形態の乱れを除けば、ほぼ円弧をなしているとみてよい。この点も、SO-150をほかの墳墓に先行するとみる根拠となる。また、周溝内の墳墓（壺棺墓ST-452、土壙墓SR-453、木蓋石棺墓SQ-454）は、当然SD-450の掘削後に築造されたものといえるが、それぞれの築造までのSD-450の埋没の度合いは、いくぶん異なっていたようである。また、これら3基の墳墓がSD-450とSD-440の合流点近くに集中していることは、これら3基の墳墓が円形周溝墓SO-140よりも新しいことを示す。

円形周溝墓SO-140の周溝のうちSD-441とSD-472は、深さが異なる。特にSD-472は竪穴式石室SQ-141の側に凸であり、本来円形周溝墓SO-170の周溝であったものを円形周溝墓SO-140にも利用したことを見ている。おそらく、円形周溝墓SO-140を築造する際、既に存在したSD-450とSD-472によって生じた突出部を丸く整えるため、短い周溝SD-441を新たに掘削したのであろう。

円形周溝墓SO-160の周溝SD-460が、円形周溝墓SO-140の周溝SD-440より後に作られたことは、既に指摘した。

円形周溝墓SO-110は、円形周溝墓SO-120の周溝SD-421と円形周溝墓SO-140の周溝SD-440の間を、それらより細く浅い溝SD-410でつないで周溝とする。したがってSO-110の残丘は円形ではなく、むしろ分銅形というべきものである。これは、円形周溝墓SO-110が円形周溝墓SO-120、SO-140よりも後に築造されたことを示している。また、SO-120の周溝SD-421に廃棄された石材は、石蓋土壙墓SR-111の蓋

石に酷似しており、SO-110 (SR-111) の築造後にSO-120 (SD-421) が築造されたのであれば、このような現象は考えがたい。

直接接していない墳墓間の関係は不明であるが、より高い位置のものが先行すると考えると、次のような築造順序を想定できる。ただし、墳墓群の造営期間はさほど長いものではあるまい。

〔SO-150→SO-170→SO-140→SO-160→SO-120→SO-110→SO-130〕

周溝を伴わない墳墓のうち、木棺墓SR-001は周溝が削平により失われている可能性があるが、土塙墓SR-002、木蓋石棺墓SQ-003は、いずれも円形周溝墓の周溝に平行するか、周溝の存在が想定される地点付近に所在する。周溝墓の存在を意識して築造された墳墓である可能性がある。したがって、〔SO-160→SR-002〕、〔SO-140→SQ-003〕と想定できる。石棺墓SQ-004については、石材の抜かれた時期を円形周溝墓SO-170の周溝（遺存せず）の築造時とすれば〔SQ-004→SO-170〕となることは既に述べたが、あるいはこの部分に周溝が本来存在せず、円形周溝墓SO-170やSO-140を意識して石棺墓SQ-004を築造したと考えられなくもない。

### ②墳墓間の格差

今回の報告では、周溝を作った墳墓を円墳（古墳）と円形周溝墓とに分けた。いずれも封土・墳丘を失った周溝残丘のみの遺存であり、両者の区別は周溝の形状と法量に根拠を求めたものであった。すなわち、SO-150のみは周溝SD-450の形態が正円に近く、溝底は水平に近い平坦面を持ち、斜面の傾斜も一定であった。しかし、円墳と円形周溝墓6基の差は些細なものにすぎない。

円形周溝墓6基も、その規模は5.5m (SO-110) から13.5m (SR-120) まで連続的であり、この間に質的な格差を見出しつづく。また、主体部の形式や副葬品の有無も、墳墓の規模に対応しているとはいいがたい。

主体部の蓋石の置き方にも、共通点がある。石棺墓SQ-131 (円形周溝墓SO-130) は南から順に石材を置き、北端では蓋石の下に礫を差し込んで隙間を埋めているが、1枚の板石を基本とする竪穴式石室SQ-141 (円形周溝墓SO-140) や石棺墓SQ-171 (円形周溝墓SO-170) でも、蓋石を乗せた後に北端に生じた隙間に板石を挿入している。蓋石を乗せる手順になんらかの約束事が存在したのであろう。南が頭位と考えられることとも関連しよう。

周溝を墳墓間で共有していたり、周溝に平行して周溝を作った墳墓を営むことからみても、墳墓間に、規模の大小はあっても、明確な格差はなさそうである。

こうした墳墓間の関係は、各墳墓の被葬者間のなんらかの関係を反映しているのであろう。おそらく、長幼などを除けば明確な身分差がなく、互いの紐帯が明確に意識されており、それを墳墓にも表現したのであろう。

### ③赤色顔料

今回の調査では、墳墓の主体部や周溝から赤色顔料が出土した。いずれもベンガラであり、水銀朱はまったく含まれていないことが、別府大学の本田光子氏より指摘されている。墳墓の主体部に用いられたものについては前章の記述に譲るとして、ここでは土器に納めて周溝や主体部内に廻糞または副葬された赤色顔料について述べる。具体的には、周溝SD-450の2ヶ所、SD-430、SD-472、SR-172の各1ヶ所、都合5ヶ所である。

SD-450の東側の例は、SD-450とSD-440の合流点近く、3基の墳墓 (SO-150, SO-140, SO-160) が接する地点である。SD-472の例もSD-441とSD-472の合流点近く、2基の墳墓 (SO-140, SO-170) が接す

る地点である。これらは、周溝の合流点になんらかの意義が認められていたがゆえのことであろう。

この想定と、先ほどの墳墓の築造順序の想定とを考え併せてみよう。SD-472の例は、SO-140の築造を契機に廃棄されたこととなる。ここは竪穴式石室SQ-141（SO-140主体部）の主軸からやや離れた位置にあり、東側が陸橋となっているので、SO-140に関連した祭祀にふさわしい。SD-450の東側の例は、SO-140かSO-160の築造を契機に廃棄されたこととなる。SO-160の主軸に近い位置にあり、陸橋の反対側であることは、SO-160に関連した祭祀の可能性が比較的高いことを示している。

SD-450の西側の例も、調査区の端のために確認できないが、隣接する墳墓のために周溝の合流点となっていた地点ではあるまい。第89次調査の成果により、尾根の西斜面まで墳墓群が広がっていた可能性は充分ある。この地点で周溝の幅に変化はないので、造り出しや前方部の可能性は乏しく、周溝の合流点と考えたい。

SD-430では、調査時に十分確認できなかったが、北端に土器に入れた赤色顔料を廃棄していたようである。詳細は不明である。

SD-450の2ヶ所とSR-172では、赤色顔料を内蔵した壺または甕に、別の土器を蓋のようにかぶせ、廃棄・副葬していた。この中には、破損した（あるいは破損させた）土器を赤色顔料内蔵土器にかぶせている例も見られる。SR-172の場合、副葬品にこのような転用蓋を用いるというのも奇妙であり、SR-172自体が墳墓であるかどうか、躊躇するところでもある。

Tab.1 有田遺跡群第178次調査の円墳・周溝墓

遺構名 主体部

直径

|        |                     |          |
|--------|---------------------|----------|
| SO-150 | 木棺墓SR-151           | 19.0m    |
| SO-110 | 石壺土壙墓SR-111         | 5.5m     |
| SO-120 | 木棺墓SR-121           | 13.5m    |
| SO-130 | 石棺墓SQ-131           | 7.0m     |
| SO-140 | 竪穴式石室SQ-141         | 11.2m    |
| SO-160 | 土壙墓SR-161           | 8.0~1m   |
| SO-170 | 石棺墓SQ-171・上壙墓SR-172 | 10.5~14m |

Tab.2 有田遺跡群第178次調査の墳墓主体部

遺構名 形式

主軸方向

墳墓の種類

|        |        |         |             |
|--------|--------|---------|-------------|
| SR-151 | 木棺墓    | 北東~南西   | 円墳SO-150    |
| ST-452 | 壺形墓    | 直立單棺    | 周溝内埋葬       |
| SR-453 | 土壙墓    | 北西~南東   | 周溝内埋葬       |
| SQ-454 | 木壺石棺墓？ | 東西      | 周溝墓SO-110   |
| SR-111 | 石壺土壙墓  | 南北円形    | 周溝墓SO-110   |
| SR-121 | 木棺墓    | 北北東~南南西 | 円形周溝墓SO-120 |
| SQ-131 | 石棺墓    | 北北西~南南東 | 円形周溝墓SO-130 |
| SQ-141 | 竪穴式石室  | 南北円形    | 周溝墓SO-140   |
| SR-161 | 土壙墓    | 東西      | 円形周溝墓SO-160 |
| SQ-171 | 石棺墓    | 南北円形    | 周溝墓SO-170   |
| SR-172 | 土壙墓    | 南北円形    | 周溝墓SO-170   |
| SR-001 | 木棺墓    | 北東~南西   | 周溝を伴わない墳墓   |
| SR-002 | 土壙墓    | 南北      | 周溝を伴わない墳墓   |
| SQ-003 | 木蓋石棺墓？ | 南北~北西   | 周溝を伴わない墳墓   |
| SQ-004 | 石棺墓？   | 北西~南東   | 周溝を伴わない墳墓   |

図 版

PLATES

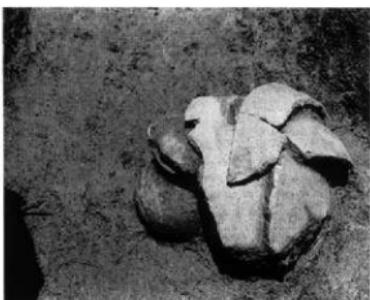




SD-150



SO-150



赤色顔料内蔵土器



SR-151



赤色顔料内蔵土器



SD-450 東端部



SR-453



SQ-454



ST-452



SO-110



SQ-130



SR-111 蓋石



SQ-131 蓋石



SR-111 墓墳



SQ-131 棺內



SO-120



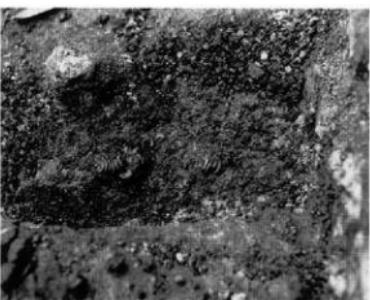
銅鏡出土狀況



SR-121



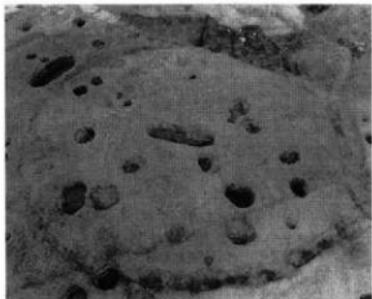
右手首裝着玉類出土狀況



左手首裝着玉類出土狀況



SO-140 (上空から)



SO-160



SQ-141



SR-161



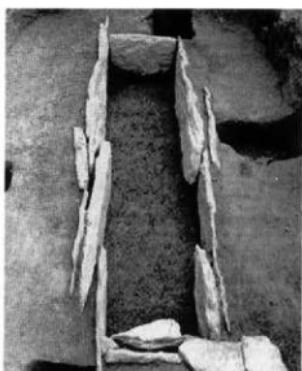
SQ-141



SO-170



SQ-171 蓋石



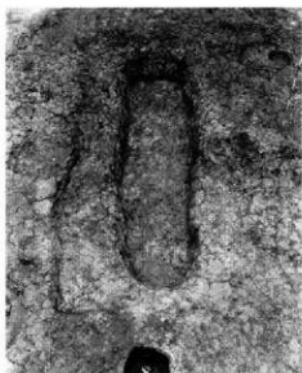
SQ-171 棺内



SQ-171 墓壙



SR-172 出土土器



SR-001



SR-172 出土土器



SC-750

---

## 有田・小田部 27

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第512集

1997年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1  
印刷 株式会社長川印刷所

---

